

平洋を遊弋して居た。漸く十四日後に同艦は我獨逸國と英國との間に開戦になつた事を聞き、夫より更に後れて日本との戦をも耳にしたのである。そこで艦長は細心の注意をする必要が起つて來た。かくて此小巡洋艦は一隊の敵に取り巻かれ、追ひ廻はされながら數週間或は帆走し或は小汽船に曳かれて數千哩の洋上を突破して漸くホノル、迄到着する事が出來た。でホノル、の港口に待ち伏せして居た日本の大巡洋艦が或る朝眼を擦つて見ると、胡桃程のガイエルは既に無事港内に碇泊して、昂然として其軍艦旗は檣頭に翻つて居たのである、そこで黃猿は尻尾を捲いて空しく歸途に就いたのであつた。

ホノル、出帆後余は同港の戰地通信員と眞面目に言い争はなければならぬ事が起つた。といふのは、此人が喜の色に輝きながら「ホノル、タイムス」を持つて來て、誇顔に其第一頁を余に示した、見るとそれには番外の大活字で余の姓名、地位及履歴が印刷してあつて、其中に一欄程の長論文を載せ余が青島攻圍中及其後に於て

行つたと云ふあらゆる醜行が述べてあつた。

是は如何にも純亞米利加式だ、然し人は新聞紙上の記事に依りて、先づ判断されるのである。此事は余には極めて痛ましい事であつた、何となれば余は亞米利加政府が此記事に基いて桑港に於て余を捕縛するであらうといふ事を大層心配するだけの理由はあつたからだ。併し船中の米國人はすべて此點に關して余を慰め呉れ、眞逆是位のこと内地の旅行に差支があらう筈はないと言つて居た、といふのは、余の爲した事は「優秀な冒險業」であつて、之は米國人の最も嗜好する所である。だから米國人は嫌ふ所か其反對に大々的に喜ぶだらうし、若し余が今少し合理的になつて、愚なる獨逸將校氣質を捨て、了うなら、「君は亞米利加で相當の金儲けをする事も出来るだらう。君は單に正當の新聞に訴へればそれで宜いので、そうすれば其新聞は其事件を廣告欄に挿入する。而してその後出来るなら樂隊を先頭に立て、各街路を巡回して講演會を開き、澤山の金錢を儲ける事が出来る」といふのであつた。

要するに大體米國人は情趣に豊かな人間である。此連中の一人に極めて快活な紳士があつて（可愛い娘と乗船して居た）此人が或る日自分の所へ来て、室の一隅に對坐しながら大真面目で斯う言つた。

「マックガルビンさん、私は貴方が大好きです、私は貴方の仕事に興味を感じて居ます。所で貴方は一體何を始めやうとするのですか。見た所貴方は金はない様だし米國に知人一人もなさそうだし、あちらでも甘い仕事はそう樂には見附かりませんよ！」

「いや私は直に獨逸に歸て、母國の爲に戦ひます、私は獨逸の士官ですから！」

彼は同情する様な微笑をして斯う言つた。

「米國から出て行くなんて、それは出来る相談ではないのです、それから貴方の信用と名譽に熱狂なさるのが困り物です、だが貴方は私の言ふ事を信じなさい、私は宜い證據を持つて居るのです、數月と過ぎぬ中に獨逸は滅亡されて、其曉貴方は何の仕事もなく滞在せられなくなるでせう、英國は戦後に於て獨逸將校が一人たり

とも獨逸國內に残ることを許可しないでせう。貴方等は全部追放される獨逸帝國は分裂する、そしてカイゼルは廢帝となるでせう。だから貴方も賢明な方法をお取りなさい、今新に郷國を建設する様にしなさい、亞米利加に在住しなさい、私は喜んで貴方を助けます」

是は余に取て少々難有迷惑であつた。そこで自分は一體獨逸の將校といふものはどんなものであるか、又實際獨逸國內はどんな状態にあるかを、此紳士にキツト答へてやり教へてやつた、すると此男は自分と一緒になつて獨逸國に對し熱狂的の誠意を抱く様になつて來た。それから後彼は余に對し一層好意を盡し、其後桑港及紐育に於て余は屢々彼の爲めに招待されたのである。

十二月三十日に我々は桑港に入つた。余は痛切に純亞米利加式の状態を感じた。數ダースといふ程の新聞探訪員や寫眞屋が疾驅して本船の上甲板にやつて來た。又集會室にも進入した、否船室内にある旅客は皆安樂に時を過すことができなかつ

た此連中は既に余の渡米すると云ふ報告を得て居たので、是等の人々が四方八面から余に襲撃を試ろみ、余の到る處に早取寫眞を取り、實に不快極まるものであつた。終に余は唯一の手段を取つて漸く助かつた、即ち余は粗野な振舞を装ひ、大聲疾呼して斯う叫んだ。「私は全然言ふ事は何もありません、此上諸君が私を苦めるなら巡査を呼んで来て貰ひます！」青島の戰地通信員たる男が彼の同業者などに對しては右の様に處置すれば可いと豫ねて自分に教へて呉れたから、余は早速之を利用したのである。

風のように常なき黄色の日本人が唯獨りコンコンと猫の様に自分の所にやつて来て丁寧なお辭儀をし齒の間からハイ／＼言ひながら、偽りの微笑を浮べて斯う言つた。「私は日本の領事館から、來た（よくも言へたものだ！）のだが、貴君が、目出度く青島から脱出したので、私は貴君に對し挨拶祝意を表します」兎に角自分は毫も恐れる所はなかつた、余は亞米利加の土地に居たのである、だが彼は自國にある

同胞を喜ばす爲め、些細な報道を日本に送りたい念が熾であつたのであらう。

此黄色の日本人を余は支那人のボーイに送り出さした。

到頭サンフランシスコだ！

十 逮捕の憂目

サンフランシスコ!

同地は廣大で馬鹿に綺麗な都會だ!

同地で最も好都合であつたのは余が逮捕を免れた事である。官吏らしいものは一人も自分を氣にしては居なかつた、それで余は多少恐怖を抱いて居たにも拘らず、數日間此地の獨逸領事館に滞在した、多くの人は余が既に逮捕されたものと見て居たのである。余は是迄桑港の大晦日の晩ほどに狂暴で亂痴氣な騒をした事はなかつた。

余が此事に關し豫しめ聞いて居た事はすべて事實に反するものはなかつた。同市の全體が恰も癡狂院に變つたかの様に思はれた。人々は皆徹頭徹尾本場の香ひを帶

びて居て、男はすべて美丈夫、金髮碧眼の婦人や娘共は一見人を惱殺する程であつた。余は知人の招待を受けて最も美しく最も大なる娛樂場に行つて見た。其入場料は莫大の高價で、その人々は最大娛樂の一として認めて居た。今晚は全くの無禮講であつた様だつた。

それから音楽も舞踏も實に我心を恍惚とする程に美しく且つ野趣を發揮して居て之こそ桑港の「唯一の」晩であつた。

千九百十五年一月二日余は桑港と告別をした、そして偶然汽船で同乗して來た余の同僚や多くの獨逸人と同じ列車中で再會したのである。

愉快な旅行であつた、殊に新聞紙は獨逸よりの吉報を齎らして居た、年老いた男女の數人は直接本國に向けて行き、我々兩將校も亦我々の目的地を去ること甚だ遠くはないのを確信して居た。

アリゾナの大巖谷で一列車追ひ越した。宏壯な自然界は不思議に驚ろくべき美裝

を凝して展開して居た。汽車は更に遠く進んで行くと、終日大平原を突貫して走るやうになり、革の靴下やモヒカナ―人共に關する少年時代の記憶が心の中に浮んで來た、それからシカゴで我々は別々になつて、余は親友を訪問し今後に於ける歐洲行は如何なる方法で實行したら宜いかなど、相談を遂げた後余は先づヴァージニアの方へ向つた。

夫から二三日を経て余は紐育に旅行した。そして自分の運試しをした。

滿三週間余は紐育に滞在しなければならなかつた。其中に余は紐育市と其住民と、其生活振とを大分見學した。

滿三週の間、其間時々自分は激昂の餘り何をしやうか自分ながら了解できない事があつた。之は今迄自分が此方面で經驗した何れよりも激しかつたのである。何れの繪も何れの新聞も何れの廣告も殆んど一として獨逸國に對し反感を煽つて居ないものはなかつた、我勇敢な獨逸の戦士を糞味噲に罵詈雑言しないものはなかつた。

チペラリーの歌は紐育に於ても亦國歌と決められた様に見えた。

米國人の迷霧を一掃してやる人は一人もなかつたのか、此人々は眞理を聞くのを嫌ひ見るのも好まぬのであつたか。

然り、大部分のものは獨逸國を全然理解して居なかつた、獨逸國がどこにあるかも殆んど知らなかつた、然も彼等はかくの如く判断を下して居たのであつた。我々は茲に至つて明らかに下等な英字新聞の虚構記事が極めて恐るべき妨害の魔力を持つて居ると同時に米國人が何等の批判もせず暗愚にも是等の無暴な通信を耽讀した事を感じたのである。

余は余の力で出来るだけの事はして置いた。

余は話したり、語つたりして説伏せやうと試みた、だが到る處に同一の答に接した「そうです、貴方が御身づからこんな殘酷な行爲をしないのは我々も信じます、併し他の獨逸人即ち匈奴人や野蠻人の様な人達はそれをするのです。御覽なさい、

明らかにタイムス紙上に載つて居るぢやありませんか。だから事實に違ひはありません、こんな大新聞が虚偽を言ふものとは思へないのです」と多くの米國人は斯う述べた。

このとき余が知己や友人から親切に歓迎せられたのは大きな慰籍であつた、余は一切に彼等に感謝する次第である。或る晩余はメトロポリタン座に行つて、殊の外感情が激して來た。そのとき數ある演奏の中に「ヘンゼルとグレンテル」の一幕が上演された。獨逸の音楽、獨逸の言語、獨逸の歌に我耳を澄した！

すると痛ましくも狂氣の様に母國に對する思慕の情が切になつて、余の心は膨れ上り湧き上つた。又余の靈魂は力の限り獨逸の歌に憧憬れた。余の心は奪はれた様になり、酩酊のやうな気分になつて街路に出た、すると直に現實の世界に喚び戻されて目が醒めたのである。

劇場前の廣場には毎晩の様に澤山の群衆が集まつて居た。向ふの白い壁には毎夜

大きな文字で最新の戦報が映寫されて衆目に觸れるのを例とした。之は活動寫眞の仕掛で壁上に寫されたものである。

勿論露國が更に又大勝利を博し、英國軍は獨逸の皇太子軍を全滅さしたと言ふのであつた！

群衆は満悦して歡聲を放つた！

それから戦争の光景が一つ宛映寫された、最初には四五隻の英佛の軍艦が見え、それから突然獨逸の巡洋艦ゲーベンが現れた。

群衆は囂々として叫び出した、或は口笛を吹いたり、或は叱！と叫び、或は馬鹿と呼んで、其頓狂の有様は丸で底止する所を知らなかつた。

併し之でも中立國であつたのだ、人權と正義とを念とする米國人の所爲であつた！

余が歐羅巴に到らんとする努力は今迄其効を奏しなかつた、然し余は此事を簡單

に想像して居たのであつた。

好機一縷といふ所で自分は一度殆んど行きかけたのを中止して了つたのであつた。余は諾威の一帆船に適當の口を見付け、直に水夫として乗込まんとした。所が此船には英國の水夫が多数乗船して居るから、避けた方が宜いと切に忠告して呉れる人があつたので、余は遂に此機会を逸して、更に其他の場所を求めた。

幾日かの後余は漸く求むる所を得た。

余は偶然ある人と知己の間柄になつたが、此男は是迄随分波瀾のある生活を経験して居た。彼は多年の間世界を放浪し、既に紐育にも長い間住んで居た。此男が本來如何して生活して居るか云ふに、余は遂に其眞實の職業を發見し得なかつたが、唯彼の社交に巧妙の手段あることを知つた、それは外でもない。古い旅行券を新らしく飾立るのであつた。そこで間もなく余と彼との間に密談を遂げ交渉は一決した。數時間の後余の旅行券は既に出來上り、余の寫眞は立派に貼りつけられ、すべての發

着報告は書式通に準備されて居た。

そこで千九百十五年一月三十日に瑞西の鑄掛屋の徒弟エルンスト、ズウゼといふものが中立國なる伊太利の汽船「ツガ、デグリ、アブルツチ」號に搭乘した、そして其下等船室に影を没して了つたのである。

二時間後には我々は「自由の像」を通過した、紐育の港外五湮の所には英國巡洋艦が二隻遊弋して港口を監視して居た。航海の自由の立派な一實例だ！汽船の航行は實に恐ろしかつた。

余は海軍將校として又多年水雷艇に乗組んで居たので色々の心配苦勞には慣れて居たのだが、然もこんな事は夢想だもしなかつたのである。

船は上が重くて、丸で狂氣の様に横揺れ縦揺れを繰り返したので、其道の人として余は海が更に膨れ荒れて來たら、船は大丈夫顛覆するだらうと心配し。それから南京虫の奴等！だが之は書けばそれだけで一章をなすに足るのであつた。航海の第

三日の午前に余は甲板上に立つて懐かしげに、一等船室の方を見て居た、そこには二名の美人が欄干越しに外を見て居た。すると一紳士が二人の方へ歩みよつた、それを見て余は殆んど大聲に彼の姓名を呼ばんとした！

此男は余の知己であつたのだ、彼は……………

然り何等の疑を容るべき餘地はなかつた。彼は余と共に上海から同道した仲間のTであつた。今や彼も亦余を認めたが、それは彼が其二名の婦人と共に下の不潔な徒弟(とは自分である)の上を兎や角と聲高く批評した後の事であつた。突如彼は沈黙して、兩眼をハッと擴げた、すると理解の微笑が各自の顔面に表はれて、忽ち廻れ右逃げて行つた。

夕方眞暗の折に余は一寸語る機會を得た、彼は上流の和蘭人として乗り込んだのであつた(無論彼は和蘭語は一言半句も話す事は出来なかつた)そして余と同様ナボリに行き、それから本國に向はんとするのであつた。

だが最も都合のよかつた事は我々二人は紐育で毎日一緒に居た事であつた、我々二人は互に郷國に歸る爲めにはあらゆる手段方法を試みんとするのである事を相互に知つて居た、併し我々は互に我々の援助人に對し何人にも一言も告げまいといふ約束をした、そして二人とも之を堅く守たのである。

所が大當りであつたのは、我々二人は同一人の保護を受けて居たのであつた。

紐育を出發してから數日後、余は突然病氣になり、高熱が出て寢臺に横臥しなければならなくなつた。その病氣が何であつたかは自分も知らなかつたが、多分マラリヤの發作であつたらう、伊太利の醫師も同意見であつて、キナインの馬鹿々々しい頓服劑を呉れた。併し其効果は即刻現はれて、余は以前よりも病勢が重くなり、數日間は四十度許の熱に苦んだ。其當時は實に筆紙にも盡されない程の苦痛であつた。牢獄の様な部屋の中に我々は四人で居た。余の寢臺の上には佛蘭西人が居て、船暈を感じない時はいつも饒舌を弄し悪口を吐いて居た。余の側には一名の瑞西人が色蒼白に、

縮こまつて居た（此れも疑はしかつた）此男は酷く船に酔つて居て、到底生きて歐羅巴に着くことはあるまいと思はれた。余の左の上床には怒りつばの英國人が居て、牛の様に兩眼は閉ぢて居ながらも、日夜其ラツカン煙管を離さなかつた、そして彼は二六時中泥酔して居て、殆んど一瞬間でも咆哮を止めないで、獨逸を罵言して居た。こんな事情だから讀者は余が平靜にして居られたか否かは推察が出来やう。剩へ余の寢床は操舵機のすぐ側にあつた、まだ其上に一番悪るいものがあつた——側の南京蟹の奴が！

余はこんな状態が有り得べきことゝは、嘗て思つた事がない。

是等の戦慄すべき疫病神は一匹宛余の處に見舞に來るのでなくて、同時に數十匹も一緒になつて襲つて來たのである。

此疫病神に比較して見ると、周囲の騷擾や嘔吐を催す様な悪臭や、船酔ひの人達などは全く物の數ではなかつた。その時自分の心身は恐ろしく衰弱して居たのだが、

それにも拘らず余は此褐色の動物を殺すか追つ拂ふかしやうとした。が間もなく余は彼等に對しては殆んど無能力であるのを知つた。

兎角する中に余は萬事關せず焉と言つた心情になつて來た。此航海は今後僅かに數日を餘すだけの事で、その上は山紫水明の伊太利に行き、兩三日の間静養して目出度く親愛する母國に歸れるだらうと悦んだのであつた。余は心身の力を盡して病氣と戦つた、殊に獨逸國の事を常に思つて居ると病勢も次第に衰退して、二月八日我々がジブラルタルに入り込んだ時には、余は殆んど全快したのである。

吁、ジブラルタルよ！

以前余は幾度か此巨岩の側を乗り過ぎた事がある。余が外國から本國に向け歸航の途次此海峡を通過した折如何に欣喜雀躍して其灰白色の巖石に向ひ手招きした事であらうか！

今度は如何に奇怪な運命が自分を待つたのであつたか。

ジブラルタルの停船は今回の航程には豫定されなかつたにも拘らず、此汽船は英艦より何等臨檢の要求も受けなかつたのに、俄に同港に這入つて碇泊した。既に伊太利は是程までに英國の奴隸となつて居たのである！

本船が碇泊すると、軍艦のランチが二隻本船の舷側にやつて来て、英國の海軍將校一名警察官數名及び武装した英國の水兵が澤山船内に上つて來た。

船内では振鈴の合圖が鳴り渡つた、「伊太利人及英國人ならざる乗客は全部船橋に集合」といふ命令が出た。ボーイは船内を右往左往して各船室を残らず見廻つた、そして羊群の様に英國の水兵及伊太利のボーイ達に圍繞せられて、我々は船橋上に追ひ遣られた。

このとき自分は餘り善い氣持はしなかつた。

併し自分は絶えず多少の自信は持つて居た、といふのは其後間もなく知つた事であるが、余以外には寫眞附の正當な旅券を所持して居る人はなかつたのであつた。

極めて不快な事ではあるが、全體で瑞西人が五人乗船して居て、其中三名は絶えず人を避ける様な静かな態度をするので、自分は彼等は嫌疑人物だと認定した。唯一人瑞西人が居たが（此男は今迄自分が見た事のないものであつた）彼も亦非常に汚なく不潔であつて、余の側に立つた時余は用心して稍や片一方に避けた程であつた。約一時間も経つと、一等船客が甚だ表面的に且禮を盡して検査せられた後、我々の番が來た。

可哀相に我々六人は罪人同様の取扱を受け、悚然として立つて居た。第一のものは伊瑞混血の労働者で右腕のない男、其妻は純粹の伊太利婦人で號泣しながら英國人の足許に跪まづいた。彼等の附屬物即ち子供等はすべて下等船室より運び上げられて居た。一人残らず號泣して居た。英人は侮蔑の眼を以て彼等を見下して居た。少し訊問をした後で此男は放免されて自由の身となつた。

其次は我々であつた。

我々瑞西人の中一番大きかつた男が右方に立つて居た。英國將校は彼の方へ歩んで行つて言つた「君は獨逸の將校だ！」

無論彼は聲高く激怒して反抗した。が英國人には何の手答もなかつた。で其不幸な男は側に寄らなければならなかつた。我々四人は英人の眼に此男よりも純粹なものに見えて居たらう。

我々は旅券を出して見せ、各々殺人の話を語つた。暫らくすると彼は言つた「宜しい、四人は行つても可いが、此一人は俺が伴れて行く！」

余は喜び極まつて胸が張り裂けんばかりであつた。するとそこへ裏切り者が出て來た。

立派な平服を着けた俄大盡風の男が英國將校の側へ近寄て、煽動がましき聲で斯う言つた「此四人を此儘放免するのは以ての外です、私は此四人は獨逸人だと確信して居ます、まだ彼等のすべての持ち物を嚴重に檢べて見なければなりません」

我々は大聲に抗議したが、何の効もなかつた。英國將校は不本意ながら且つ此惡漢に對し侮蔑を感じながらも、其言ふ所を用ひた、そこで船室内の檢閲が始まつた。そして一物も残さず掻き廻された。此惡徒は到る處に嗅ぎ廻つたが、嫌疑を受ける様なものは何一つ發見されなかつた。署名一つなかつた、全く何もなかつた。すると突然此野郎ぐるりと向き直つて、余の上衣を裂き取り、余の胸のポケットのあたりを探した、それから勝ち誇つて、其側に居た將校に斯う言つた。

「御覽なさい、此處にも署名も記名も一つもありません、之が獨逸人の證據です、此男は記名をすべてなくなして了つたのです」

咄！此畜生、頭蓋骨を碎いてやりたかつた！

間もなく或る人から聞いたのだが、此平服の男はジブルラルタルのトーマス、クック兄弟商會の代理人であつて、汽船に乗り込んで通譯を行ふ旁ら、惡むべき間諜の仕事をして居たのである。非常に立派な獨逸語を話して居た所から見ると、彼は疑

もなく多年獨逸國に居て厚遇を享けたのに違ひない。其癖に此狐の奴既に今日迄にも多數の不幸な人々を破滅の淵に陥れたのであらう！

再び我々五人は丸で畜類の様に船橋に驅り立てられた。すると今度は第二のユダス、イシヤリオート（裏切者、反逆者の意）が近づいて來た、此奴はクツクの代理人が呼び寄せたのである。其第二の奴は一等の瑞西乗客であつたが、右の惡徒の指圖で我々を瑞西式獨逸語で試験するのであつた。

我々五人は一樣に反抗した。

何等の抗議も無効であつた。余は愚にもつかぬ作り事を語つて見たが、何も甲斐がなかつた、例へば余は獨逸語なんて全然出來ない、生れて漸く三年もすると余は兩親と共に瑞西を出で伊太利に移住し、それから又亞米利加へ落ち延びたとも言つた。

立派な伊太利語と亞米利加語とで、余は命からく喋べり立てた。で殆んど放免

されさうになつたと思ふと、例の狐めが又何やら囁いた、そして………到頭化の皮が暴露して了つた。

英國の將校はもう此上は何事も聞き入れなかつた、彼は僅かに斯う言つた、「既に極めて多數の瑞西人がジブラルタルを通過して行つた、どうしたつてこんな澤山居る筈はないのだ」

余は殆んど狂はんばかりに、衷心憤怒の炎に燃えて、引き摺られて行つたのである。急ぎ余は一つ二つの所有物を掻き集めた、余は獨逸の一婦人の手の中に他人に見られぬ様に一片の書き付けを渡した（婦人は間違ひなくそれを余の親戚に送り届けて呉れた）それから自分は海兵に見られる様な粗暴な跳躍をしてヒラリと舷門を飛び下りてランチに乗つた、見ると他の四人の薄命連中は既に全く膝を屈して居た。其後から英國將校が例の惡漢と乗り込んで來て、ランチは出發した。

汽船の欄干にはかの瑞西の裏切り者が立つて、人の苦痛を喜んで見下して居た。

それを見ると自身はちつと我慢が出来なくなつて、跳び上り、彼に對して拳固を振り廻し、罵詈雑言を浴びせかけてやつた。

それに對し彼はヒステリーの反逆者の笑を以て酬へた。

先きの方右舷から一對の悲みに満てる獨逸の婦人の眼が沈黙の中に最後の告別を余に示して居た。

左様なら、多幸なる仲間よ、余の爲めに本國に宜しく傳言を頼む、其本國へ貴方達は數日にして再び足を履み入れるのだ！

十一 俘虜生活の苦痛

英國の將校は余を慰めて「心配する事はない、俺が保證する、君は今日にもジブラルタルで瑞西の領事に面會する事が出来るであらう。其際領事が君の旅券を正當と認定しさへすれば君は即日放免される」

と斯う言つた。但し同人の言にどれ丈の力量があつたかは其後間もなく余の能く知つた處である。暫くするとランチは陸に向つて進み、間もなく戦争の空氣が漲れる港内に到着した。

十人の兵士が既に埠頭に銃劔を附けて待つて居た。二三語の簡単な命令が下ると、我々は持つて來た數個の物品を背中に擔つて、二列に整列し、彼等兵士に取り巻かれ「早足進め」の號令と共に、悵然たる面持を示しつゝ動き出した。

此のとき自分の感想や、四圍の状況は如何であつたか。すべて夢の如く茫然として取留めた記憶に残らぬ。余は殆んど全的確な思想を纏める事も出来ない程意氣が銷沈して居た。

吁、捕虜になつた！

余は私かに斯う思つて殆んど自失せんとした。

「これが實際眞實の事だらうか。一體そんな道理があり得るものだらうか」など考へて煩悶した。

それは誠に痛ましく、考ふべからざる事であつた。丸で犯罪人の様に我々は此處を引き廻はされ、丸で犯罪人の様に我々の通り過ぐる處は群衆から嘲罵の言を浴せらるゝ如く感じ、冷眼を以て眺められる如く思つたのである。護送の任に當る兵士は我々に駆足を命じた。余は近頃まで犯されて居た熱病が未だ全快して居ないので、此兩三日といふものはキニーネ以外に何一つ胃の腑に入れる飲食物がないので、

殆んど仆れんばかりに衰弱して居た。而して赫々たる日光は岩壁の上から照りつけ頭痛は岑々として起つた。加之我々の精神上の苦痛、何等望みの絶え果てた今日の境涯！

余は自己の心を慰むるに言葉がなかつた！

我々は暑く熱した狭隘な小路の中を通つて爪先上りに高く高く登つて行つた、間もなく市街の家々は我々の脚下へと消えて了つて、道路の兩側には只嶮岨で其肌を露出せる斷崖があるばかりであつた。一時間すると我々はジブラルタルの岩層の最高頂に達した。すると嚴めしい號令が響いて、鐵條の障碍物と鐵扉とが開かれた、余は物憂げに之を顧ると、それに又錠が下りて閉され、暫時の間鎖や門が鳴つて居た。噫我身は全く捕虜になつたのだ。

到著の劈頭我々は憲兵詰所に曳き行かれ、更に訊問を受けた。余は極力抗議した。即刻かの英國將校が保證した様に我が領事の所へ連れて行つて貰ふ様に要求した。

されど其答は曖昧になつて僅かに無情な苦笑を見るに過ぎなかつた。吁！思へば、斯くの如き高地に曳き上げられて、苛酷の待遇を受けやうとは、我々が最初に豫想した處ではなかつたのである。此高處に立つて、今日を限りあらゆる希望を強奪されて了つた人は我々の外にも無多かつた事であらう！

間もなく我等の身體検査が始まつた。

「捕虜中に金銭を身につけて居るものはないか」

俘虜收容係の一將校は斯う叫んだ。併し言ふ迄もなく何人も之に答ふるものはない。我々は脱衣を命ぜられた、衣類は一つ毎に詳しく検査され、金銭、双眼鏡、寫真機等を取調べられ、殊更に文書の有無を詳かに調べられた。余は第三番であつたが、シャツは着た儘で許された。

將校「金銭を持つて居るか」

余「持つて居ません」

曹長が余の身體を手探りした、すると突然シャツの左方の胸のポケットの中で何かチリン／＼と鳴つた。

「あれは何だ？」

「知りません」

そこで彼はポケットに手を入れて取り出したが、外でもない、それは最上の亞米利加の二十弗金貨と小さな眞珠貝とで作つた極めて立派なシャツ釦であつた、飾釦は検査の際金貨とぶち當つたので曝露されたのである。余は秩序を愛する念からこうして置いたのであつた。若し余が二日前に飾釦を棄て、了つて居たら（注意深く保管しないで）こんな事は起らなかつたのである。英國の兵士は喜んで居た、こんな面白い事は度々あるものゝ様であつた。が彼は更に綿密に検査を續けた、そして忌々しい事には他のポケット及ツポンの兩ポケットから各々一個宛の金貨を攫み出した、その上又余が數月の間忠實に身を離さず持つて居た小さなブラウニング

式のピストルも奪はれた。

以上の諸品は残らず没収せられた後、余は再び衣服の着用を許され、夫より牢獄の前庭に居る他の同囚の所へ放ち遣られた。

それから我々は未來の收容所に連れて行かれた。すると約五十人あまり幽囚されてゐる獨逸人が集つて居たが、聲高く呼びかけながら我々を迎へた。此連中は開戦以來既に此處に居たので、明らかに其快活な氣持を全然回復して居たのであつた。其時新に知遇を得た同僚共は時を移さず自分等を食事の席に招いた、そこで我々は捕虜が手づから料理したパン腸詰を餓鬼の様に貪り食つた。

食後に我々は勞働の事業に取り掛つた。

先づ我々は石炭と水との運搬を命せられた。我等の組合は大體身長に依て區分せられたが、自分は偶然かの不潔な瑞西人即ち余が既に汽船中で邂逅して頗る不快を感じて居た彼の男と一緒にあつた。聞いて見ると此男も亦錠前屋であつた、換言すれ

ば自分の撰んだのと同じ職業を持つて居たのである。

其後我々兩人が長い間に一緒に居た時に、我々はお互の職業に多少の修正を加へ、錠前屋を止めて城主とした。(錠前屋は *Schlosser*、城主は *Schlossherr* 類似語をもちりたるのみにて深き意味なし。)

かく修正しても我々は何人をも欺いたといふのではなかつた、此仕事は取り分けお安く出来るといふ利益と又少し言葉を變化すれば出来上るといふ便利があつたのである。

併し只今の處我々は相變らず石炭を運搬した、そして籃が餘り一杯になり過ぎない様に注意を拂つた。何故と云ふに、實は我々兩人とも病身であつたからである。かくて我々は石炭と水とを運んだ後に、三組の材料より成る兵員用の石の様に堅い寢床と毛布二枚とを受取つた。それで今夜は休息といふ事になつた。そこで第一に顔を洗はなければならなかつた。余は其折の光景が今日でも眼前に彷彿として

忘れぬのである。

余と同じ組になつた彼の不潔な男は其洗面盥を余の盥の側に置いて、何の遠慮もなくシャツを脱いだ。余は之を見て驚いた、彼の身體が筒様に清潔だらうとは思はなかつた、其五體は申し分なく筋肉も能く發達して居て、恐ろしく綺麗を極め恰かも特別の磨きがかつて居る様であつた。が、頭、頸、手と來たら！之はまた何といふ事だらう、身の毛もよだつ様に汚れて居た。余は突然洗面を中止して、只管之に見惚れて居た。此男の洗面水は丸で煮べ汁の様に黒くなつたが、當の本人は平氣で余の側に立つて居るのを能く見ると、丸で別人の様であつた。以前は黒く汚れて居た頭髮が金色鮮やかに輝き出し、顔は艶かに色は白く眉が秀で、手は細く身長すらりとして如何にも立派な形であつた。そして不思議な事には、頬と額顙とには、傷痕が、紛ふ方なき獨逸學生の傷痕らしく現はれて居た。そこで兩人は相互に問ひつ語りつ身の上の顛末を尋ね合つた。同人は間違ふべくもなく獨逸の學生であつた。今は亞米利加で

立派な自動車工場を設立して居るのだが、豫備將校として母國の召集に應せんが爲めに、職業地の方は萬事其儘にして來たのである。夫より我々兩人の間には直ちに友誼が成立ち、悲哀な運命に辿着いて再び離散の不幸を見るまで、數時間一緒に拘留されて居たから我々は共に信實な斷金の友であつた。併し其後間もなく我々城主は眞實の素情を互に知つたのである。

夕方十時に歸營の喇叭が鳴り渡つて、どの部屋も皆消燈した。

余は寢床を窓に突きつけて設けたが、其窓は床の近くまで下つて居たので、地床に横たはりながら、余は樂に窓を眺める事が出來た。

此日は種々と新らしい感慨に接したが、今や漸く余は沈靜と熟考との暇を得た。

我々の抑留されて居る營舎はジブラルタルの最高頂で、即ちかの絶壁が屹立して南方の海上に臨んで居る所にあつた。

窓から見ると遠く／＼下の方にジブラルタル海峡の水が不思議に色白く月影に映

じて居た。

彼方遙かの地平綫上には亞弗利加の海岸が晴れやかに此方と呼應して居た。

下の方には自由の表現があつた、船は彼方此方に航行し、其中には欲する所どこへでも赴く事の出来る自由な束縛のない人々が……然も自由といふものが如何に尊とく有り難きものであるかを意識しない人々が乗船して居るのであつた！

斯う思つて來ると自分は狂人になる様に陰氣になつた。

余の胸には種々の感想が湧き上つて來た、又其日の出來事が心の中に出沒した。

かくて自分も亦逮捕の厄に罹らなかつたら、下に見ゆる漣波の上を汽船に乗つて蹴破る事が出來たらうと思ふと、憤怒の情が鬱勃として胸一杯に擴がつた。

吁！思へば、今日は二月八日即ち余の誕生日であつた。本日こんな境遇にならうとは余は前以て少しも想像しなかつた。

余は丸で狂人の様に寢床の上を輾轉反側した、そして今頃は逮捕されて居なかつ

たらどんなに愉快であつたらうか、今日は一體自分は何を望んで居たのであるか、どんな風に自分は未來を描いて居たかなど、沈黙考して居ると、手も着けられぬ程の絶望の感念が余の頭腦を襲ふて來て、自分は腑甲斐なき現狀に對し悲憤の極、兩眼からは熱涙が迸り出で、更に止め得なかつたのである。

吁！此鬱憤の情よ、彼愛慕の一念よ！

當夜此の如く感じたのは余一人ではなかつたらう。

余の近傍に在つた他の四つの臥床からも蒼白の顔が見えて居た、其大きく開いた兩眼はキツと天井を見詰めて居た、そして噛み殺した嗚咽歎歎の聲は人知れず夜具の中に消えて居たのである。其翌朝は四時といふに、我々囚人は最早や起された。英國の一下士が各室を巡廻して、我々獨逸人の捕虜は二十分内に當地を出發して、既に埠頭に用意せる汽船に乗り英國に渡航する様に、即刻身支度せよといふ嚴命を受けた。

余は心中私に斯う思つた。英國へ行くつて？そんな事はあり得べきでない、我々は瑞西人だ、我々は今日にも我々の領事に交渉する筈である。

英國人の禁欲主義者然たる頑固な平靜の態度に對しては、我々のあらゆる試みは全く効を奏しなかつた。そこで取急ぎ持ち物を掻き集めて、正しく三十分後には我々六十五名の捕虜は百名の嚴めしく武装せる英國兵に圍繞せられて、旭日の輝く朝霧の中を行進し、ジブラルタルの斷崖を下つた。

併し我々の誇顔は毫も傷づけられては居ないといふ事を我々は英國人に示したかつた。そこで聲調高く且つ朗らかに、然も我々の胸中に沸き返る憤怒の情を宥め、將來の希望に一層力を得て、我々は「ラインの守り」及「光榮高き獨逸國」の歌を皇天も聞けよとばかり歡び歌つたのである。

下には巨大な運送船が碇泊して居たが、舷側に溢るゝまで英國の軍隊を以て満たされて居た。訣別をする人、告別を受ける人の群り騒ぐ中に一條の細い通路が開かれ

我々は雁行して排列擡刑を受けたのである。但し茲に余は一言しなければならぬが、此際我々を惱したものは一人もなかつた、我々に何事か罵聲を呼びかけたものは唯一人もなかつたのである、沈黙の中に我々の通路は開かれ、沈黙の中に我々は通過した、否時折は我悲しき行列に對し同情同感の一瞥を與へた人さへもあつたのである。

船では前部第一區劃の船艙内に極めて粗末な一室が設けられて居た、腰掛、机、卓、釣床等の用意も出來て居て、全部軍隊輸送船の如き奇觀を呈して居た。

其室には二人の番兵が銃劍をつけて立つて居た、上の昇降口にも亦番兵が二名つけてあつて、艙口は外から丈夫な蓋を拵へ閉鎖してあつた、其中に我々は係蹄にかゝつた様に這入り込んだ。

此小室の舷窓は鐵の窓扉を以て固く閉め切つてあつたので、我々には誰れも外を見たり又舷窓から燈光で信號する事などは到底出來なかつたのである。少しすると船

が軽く揺動し、機關の音響が聞え、て我々の海上牢獄は徐に且つ柔かに上下に微動をなし始めた。

我々は漸く大海に出て來た。

終日船は航行を續けた。我々は嚴重に警護され、一室の内に幽閉されて居た、日中一回だけ一時間ほど上に出て新鮮な空氣を吸ふ事を許された。極めて粗末な廁が前甲板上に二三枚の板を寄せ集めて設けられてあつたが、用のあるものは番兵に届けなければ其處に入ることができなかつた。若し廁に行く必要があると、銃劍をつけた二兵士と同道して用を達した。其間英國兵は我々に對して毫も眼を離さなかつた。此目的の爲めに一人以上のものが同時に甲板に現はれる事は決して許されなかつた。されど食事は上等で、本統の船料理とも言ふべく、殊にパン、バター、及び豊富な上等のジャムは優れたものを與へられた。我々は室内に閉ぢ込められて出來るだけ讀書したり、談話したりして時を過ごした。種々の時事問題は話頭に上つ

て我々の將來は如何、英國に於ける我々の運命は如何など、盛んに論評せられた。船室の中に常に立つて居た二人の番兵も間もなく我々と仲好になり、我々は佛國の戰線に於ける状態を語つて、彼等を甚だしく憂慮したのである。

船がビスケーに來ると極めて險惡な天候に出會つた。

我小室の中は見るも痛ましい状態であつた。五十六人といふ多人數が豚小屋同様の狹隘な部屋に無理やりに押込まれ、採光は不充分であり、換氣の方法は完全ならず加之我々捕虜の大部分は已に船暈に苦しんで居た。其中でも監視の番兵と我々に食事を運んで居た兵士とが一番困苦を感じ船酔ひをして居た。之れこそ見るも慘憺たる光景であつた。我々が英佛海峡の附近まで來ると、本船の船員等は一様に神經過敏になつて俄に騒ぎ出した。毎日、救命衿衣の検査が嚴重に行はれた。我々の上甲板休息は全く廢止せられ、英國兵の我潜水艇に對する焦心苦慮が絶えず、我々に向つて奇怪な質問を發することを一切止めなかつた。我々は無闇と彼等に恐怖の

度を高めさしてやつたのである。

漸く十日後に汽船はブリマウス港に入港した。錨鎖がガラ／＼と鳴り潜水艇に襲撃される、危険を逃れて安全な港内に碇泊すると、英國兵士が獨逸潜水艇に襲はるゝ危険を免かれたので、欣喜雀躍して隔壁の間に跪いて、感謝の讚美歌を歌つて居るのを聞いた。

此港内に到着すると、一隻の通報艇が直に舷側にやつて来て、我々捕虜は言ふ迄もなく二倍の番兵もろとも收容されて、陸地につれて行かれた。

陸上では是程多数の捕虜に對しては充分の準備が出来て居なかつた様であつた。英國人は頭から途方にくれて居た。如何なる手段を取つて宜いのか、どんな注意を加へてやつて可いのか、何人も全く知らなかつた。

漸くすると我々は一列車に積み込まれたが、余は一人で一車室に乗込んで、右も左も前も各一人宛の銃劔をつけた下士が控へて居て、余を厳しく警衛すべく嚴命を

受けて居たのである。かくも特殊の名譽を加へらるゝ理由は下記の通である。

余は所詮再び放免せられ、又は瑞西人と認定さるゝ事は全く不可能だと覺悟したので、乗船中監督將校に對し余は他の捕虜と同じく地位相應の待遇をして貰ひたいと云つて正當の要求をしたのである。英國の將校は、若し余が決して逃亡を企てず又今回の戦争には今後加はらざる誓約をするならば、即刻余を一等室に收容すると明言した。勿論余は怒つて其要求を退けて了つた、そこで余は再び貨物室に送られたのである。夫より其唯一の効果といへば警護が一層厳しくなつたといふ事であつた。其日の黄昏に、我々はポーツマスに到着した。停車場及其他の所に於ても、何人も我々に對し如何なる所置を取るべきか知つてゐるものはなかつた。此處に於ても亦、捕虜の員數が甚だ多大なる爲め（併し我々は五十六人だつた）彼等は全然其處置に窮し殆んど方法に苦しんで居た様であつた。

遂に我々は禁足場（稍や上等の監獄であつた）に送られた。此處でも亦大なる驚

異と混亂とが見られた。此禁足場といふのは、其目的は泥酔した兵士や水兵等の夜間に街路や酒場に集合して居るのを抑留して、其酩酊を一夜の睡眠に依つて醒ませ、其翌日それ相當に根棒でした、か打擲した後、所屬部隊に送り届けるのであつた。老年の粹惡な獄吏が一人、それから同様老年ではあるが併し温厚らしく寛大な兵士が二人監視して居た。我々は三箇處の分室に別居を命せられた。是等の部屋の中は全く器具や裝飾品が無一物で、情けなく細い瓦斯燈が朦朧と輝やいて居た。其上に玻璃窓は大部分破壊され、恐ろしく寒氣が侵入し、暖爐には無論火はなかつた。我々は終日何等の食物をも貰はなかつた、それで喪家の犬の様に飢餓を覺えながら晚餐の時刻を思ひ喜んで待つて居た。

夕食？所が之もなかつたのである！

そこで我々は二人の老兵士の所へ行つて、間もなく仲好になつた。心付を少しやるとすぐ不思議な効果が現はれた。老た蹠跟共は我々の爲めに奔走至らざる所がなか

つた。彼等に金錢を渡して三十分も過ぎたと思ふと、彼等は既にパン、バター及肉類を重く荷つて喘ぎつゝ歸つて來た。大きな茶瓶が二つ牛乳と砂糖とを混ぜて供へてあり、我々は自から木炭を運び來て、懸て三つの暖爐はバチ／＼と音を立て、盛んに火が燃えた。それから食料品は優秀であり、且つ甚だ豊富であつて、實際我々文字通の餓鬼でさへ少々残した程であつた。

夫れから兵士が二三の英國新聞を差入れて呉れた。このとき我々の歡喜に咽ぶ上機嫌は絶頂に達した。如何にも精神的の飢は肉體的のそれよりも一層強かつたので、實に我々は此數週間と云ふ間世界に何事が起つたか毫も知らなかつたのであつた。無論新聞紙には唯々英、佛、露の勝利のみが報道されてあつたけれども、然も尙ほ少くとも我々は何處に何事があつたかは知つたのである。

酒類も亦我々には嚴禁されて居た。併し英國に於ても亦禁令といふ招牌は違反者懲戒の爲めに設けられて居る様であつた。即ち我々の番兵の一人はかの英米の兩國

に廣く流布せる共済組合の支部員であつて、然も偶然余の友たる彼の城主が其支部長であつた。此兵士が余の友の卸の穴につけてある共済組合員の記章を見ると、そこに昵懇な友情が成立したのである。此監獄の一階には小さな酒保があつたが、我々は交互に此親切な支部員に伴れられて下に行き、酒で身を固め、其上ポケットにはビール壘で膨らみて上つて來たのであつた。

最も好都合であつたのは、銃剣をつけて我々の戸の前に張番をした番兵等が、心易く我々を行かした事であつた。否それのみか彼等は二三本のビール壘を持って來て貰ひたいと我々に懇願したのである。夕方九時頃には我々は彼等と共に銃器の操法を練習した程に、彼等は不謹慎になり、一番兵の如きは十一時頃に其銃を落し、腰掛にして居た炭箱諸共ひつくり返したのであつた。

若し余が其當時既に、其後漸く五ヶ月の拘留の後に得た經驗を持つて居たら、余は其折既に脱出して居たであらう。

他の收容所に於ても同様であつたが、此監獄に於ても我々が英國兵士と相觸接する所にあつては、彼等の第一の願望といへば、我々が互に幾分なりとも懇意になると、我々の宛名及出來るなら獨逸に於ける知人の宛名をも書きつけ貰ひ、更に英國兵士何某は我々を親切に待遇したといふ證明のある紙片を交附して呉れといふのであつた。彼等は是等の書付を神聖な守札同様に保管して居て、一朝戦線に立ち獨逸の捕虜となつた場合に、我軍隊の人々に見せつける積りであつた。

我々は睡眠用として帆布製の藁蒲團の極小形のを渡されたが、之は非常に短かくて足の脛は全く下の方に垂下し、又其幅が非常に狭くして甚だ巧妙な曲馬師でもなければ到底其上に背を乗せて平均を取る事は出來ない程であつた。其他には毛布が二枚あつた。熊の様に我々はしがみついて寝た。兎に角翌朝起て見ると我身は臥褥の側に横になつて居たのである。翌朝これは日曜日であつたが、陸軍將校中の一高官が我々の檢視に來た、そして我々の希望を聞かれた。余は此ときも重ねて我

身分が戦時捕虜將校として待遇さるべき権利あることを極論した。此男は甚だ好意ある人物であつて、我々が翌日指定地に到着した曉には、そして……と萬事余に約束して、何物をも拒まなかつた。

我々は遂に次の月曜日に監獄から出された。いつもの様に警護兵に擁せられて港内まで行進し、小汽船に乗り込み、碇泊場に向けて出發した。

一時間も航行すると、我々は假設の捕虜收容所となつて居る一大汽船に到着した。が、其汽船の指揮官が我々の事に就ては一切承知して居ないのみならず、且つ船内に一箇處の空席もないと言明したので、我々は長い交渉の後再び同船を去つて行つた。其次の汽船（之はキューナード線の定期船アンダニア號であつた）でも同一の芝居が演ぜられた。併し我々の案内役たる英國將校（少佐であつた）が收容所指揮者よりも言前がよかたつのか、或は何に原因するのか、兎に角我々は三十分もすると漸く乗艦を許された。

肥滿せる高慢痴氣の一尉官が我收容所の指揮官であり、同時に此船の通譯を務めて居たが、此男が我々を收容した。

余が検査せられる番になると、余は辭を低うして余の希望を提出し、規定通に將校宿泊所に入れられんことを極力要求した。所が此男の返答と來たら誠に言語道斷で、其下劣極まる性格を明かに曝露したのであつた。

「俺は君を特に酷く取り扱ふ積りだ、俺は既に君の事は聞いて居る。君は潜かに青島から脱出し、何回も君の名譽の誓約を破つて居る。此上一言たりとも吐いて見ろ、すぐ監禁して、君が全く口が利けなくなるまで絶食を命するぞ。英國の將校は獨逸に於て甚だ冷酷な待遇を受けて居る、君は今それを償へば宜いのだ」

之は如何にも余に取て酷い有様であつた。余は之に對して何等の言語も吐けなかつた。

此汽船には千名以上の捕虜が居た。その抑留の状態といつたら、余が是迄に實見

した最も破廉耻なものであつた。船室内に一箇の燈光もなければ空氣の流通も悪く、我々は船の下層室内に密集せしめられ、身體の運動といへば僅かに小な前後の兩甲板を歩行するだけであつた。我々が箇様に仕向けられた小室に導き入れられると、余は全身陰森な鬼氣に襲はれたのであつた。余は長期間此處に住居しなければならなかつたら、必ず發狂したであらうと信ずる。所が我々に附いて居た英國下士は物の分つた好人物であつた様だ。余は幸に此男を介して余の僚友の錠前屋と一緒に舷側に一小船室を得たが、茲には船窓も備はつて居た。此の如き有様だから船上の生活は甚だ單調であつた。朝は六時起床、夜は十時消燈。午前午後各二時間宛上甲板に追ひやられ、正午には點呼があつた。食事は船中の巨大な食堂で喫した。一食卓に十二人宛着席し、他の人々同様余も交代で食卓番の勤務に當り、船内の厨房より其食事を運び込み、又食後にすべての食器を洗つたのである。

此收容所の指揮官はマクスステットといふ名であつた、此男は平時はウイスキー

の行商を職業として居たのだが、其仕事で多大の金錢を儲け、士官の免狀を買收したのである。我々が到着すると殆んど同時に余は此男を激怒させた事があつた。それは斯うである。我々の中何人が一日一圓二十五錢宛を支出するかと、彼は藪柄棒に尋ねた。此の如くして金錢を支出すれば、其人は自分一人だけで一室を占有し、稍や上等な食事を與へられ、食器を手づから洗はなくても宜いといふのであつた。所か何人も此詐欺に甘々と乗せられるものがなかつたので、彼の機嫌が殊に悪かつたのである。

第二日目に余は英國政府に向け英文の上申書を認め、それを持つてマクスステットの室へ登つて行つた。彼は嘲笑して齒を剥き出した「無論君の請願書は其筋へ差出してやるが、俺が之に何を書き附けるか君にも想像がつかう。獨逸では英國將校は丸で牛馬の様に鋤を握らせるのだぞ、君は今これを贖罪しなくてはならぬ」

余は此申分が愚にもつかぬ事であることを説得しやうとしたが、それは無効であつ

た。毎晩余等の就寝後巡視に際して彼は特に余の室に來り、電燈を點けて斯う言つた「まだ此處に居るのか」餘りと言へば餘りに子供らしいではないか。

或日マクスステットは我々五十人の公民捕虜に命じて、上甲板を洗滌せしめた。或は舷窓を充分に磨かした。我々は之に對して言ふ迄もなくストライキをした。そしてどこまでも拒絶したので、二回晝食抜きと夕方九時就寝との嚴罰を受けた。マクスステットは此所罰を申渡すに當り甚だ卑怯であつて、檢閲の際身自ら我々の前面に現はれて、宣告する如き事はしなかつた。否、彼は充分な遠方に止まり、一下士を傳令として送つたのみであつた。

其ときマクスステットは白泡を吹いて怒つて斯う云つた。

「勿論今度もあの飛行屋に其罪があるのだ、彼奴は全乗組員を煽動して一揆を起さうとしやがる、宜しい、仕返しをして居る、軍法會議に廻してやるから見て居ろ！」併し是は余には荷が重過ぎた、余は全然罪はなかつたのである、そこで余はマク

ステットに宛て、頗る強硬な手紙を認め、其不都合を責めた。其中に君は唯一時の中尉ではあらうが、一時的の紳士ではないといふ旨を仄めかして置いたが、それが却て効を奏したやうだ！

其後マクスステットは余に向て此飛行屋とは今後何も關係したくないと聲明して居た、すると其翌日は既に一汽車が舷側に横着けになり、余及同感の人数名は「アンダニア」號と其醜怪なる獄吏の手より離れて他處に移轉すべき命を受けて其汽船に乗込んだのである。

其時自分は非常に嬉しかつた。我々は汽車で西の方へ數時間疾走した。今回も亦余は無論一車室に唯獨りで、三人の下士の外に一士官が余の護送の任に當つて居た。夕刻ドーチエスター着。

此處には一種特別の風が吹いて居て、我々は直ちにそれを認めたのである。捕虜收容係のミツチエルといふ海軍大佐が余の方に進んで來て、丁寧に余に將校なるか

と尋ねた。

「そうです！」

「とすると私には貴方が兵卒收容所に抑留せらるゝのが不思議に思はれる。相濟まんが私は貴方の同行者として士官をつけて上げる譯には行かない、が併し一番年長の曹長を差上げやう、そこで貴方は單獨に他の捕虜の後方をお行きなさい」

余は無言で點頭いた。

我々が此奇麗な清潔な小都市を行進して居ると、突然後方に當つて聲音の朗らかに清新の氣を帯び且つは熱狂せる如き調子で「ラインの守り」極めて壯美なる軍歌、それから「光榮高き獨逸國」の歌が響いて來た。我々は白晝夢をみて居るのでないかと思つて居た、そして驚異の眼を睜つて振り返つて見ると、我々の後方には約五十人位の倔強な獨逸兵が行進して居たのである。彼等は我々の荷物を持つて來る爲めに收容所から停車場に行くべく命せられたのであつた。

何と我々の心は膨れ氣は昂つた事であらう！敵國の眞唯中にあつて、負傷や禁獄の苦を嘗めながらも、此美しくしき熱誠、此の音吐朗々たる軍歌を高唱して居たのではないか。茲に我々は英國人の性行に關して大に認容して遣るべき一事がある。それは他なし、彼等は甚だ寛大であつて、人民は常に模範的の舉動をして居た事である。彼等は無言の儘街路の兩側に密集して立ち、或は各戸の窓から金髮碧眼の頭を伸して見て居たが、どこにも侮蔑的の動作をするものなく、どこにも罵言一つ言ふたものもなかつた。否、彼等は幾分古來の獨逸の音調を怪異の念に驅られて味つてゐる様であつた。

收容所では我々公民捕虜は各三十人につき小さな木造營舎を一つ宛配當せられたが、之が寢室、居間、及食堂を兼用するのであつた。直接寢床の上に置かれた極小の帆布覆の藁蒲團と毛布二枚とが我々に與へられた。例の大佐は不幸にして塲所の狹隘な爲め余に對して特に一室を供する事が出來ないから、宜しく現状の儘で勘辨

して貰ひたいと頼んだ。

ドーチエスターの宿營所は大約二三千の捕虜を收容し、其建物の大部分は古き競馬厩及木製營舎とから成つ居た。此同じ厩には既に百年前元帥フォルヴェルツが英國訪問の節獨逸標騎兵が茲に宿泊したのであつた。

捕虜は此地では非常に氣樂に暮した、食物は品質がよく其分量も多く、待遇上に就ては何人も一點の非を鳴らすべき事もなく、遊戯運動も充分注意せられて居た。

殊にミツチエル海軍大佐とオウエン海軍少佐とは我々の安寧の爲めに努力して呉れた。此兩人は性質極めて善良な老年將校であつて、是迄多くの戦役に加はり、兵士を遇するの途をもよく知つて居た。此兩人と英國醫師とは又我々の爲めに樂隊、運動具遊戯具を提供し、出來得る限り我々に好意を表して呉れた。更に又最年長の獨逸捕虜なるミュンヘンの特務曹長は我々一同の爲め非常な功勞を彰はして呉れた。彼は本時は商人であつて英語を流暢に話し英國の事情に能く通じた、全く優れた男であ

つた。彼は實に我々全部の靈魂であり、此收容所の實母であつた。彼のする事なす事一つとして沈思熟考の餘に成らなかつたものはなかつた。彼は英國の收容所指揮官の右の腕とも言ふべきであつた、若し此收容所に彼が居なかつたならば、英國人等（彼等も亦組織的才幹は少しも具へて居なかつた）は全然施すべき途を知らなかつたであらうと思ふ。此特務曹長が如何にせば我々の安寧幸福を進め、如何にせば我々と英人との間に諸事が圓滿に成立するかをよく理解して居た。其才幹の非凡なるのは實に驚くべきものがあつた。而して英國將校等も亦彼に頼る所が如何に大なるかをよく辨へて居た。自分がドーチエスターに着いた翌日に再び將校收容所に移轉を乞ふ爲め上告を提出した、何故となれば余が豫想したるが如く、余の最初の上告はマクステット氏が握り潰して了つたからである。漸く二週間もすると、陸軍省より英國に於て適當の知人を指名し得るかといふ照會を添へて返送して來た。そこで余は頗る困難を感じたが、黙止することもできぬから、英國の知人に書を飛ばした。

すると三日後には既に其處から報知があつて、彼等は余の知人であり且つ喜んで余の保護に當らうといふ返答に接した。そこで又余は書類を陸軍省に廻附して、辛苦を忍びつゝ徐に余の進級の日を待つて居た。

吁、待つた、待つた「待てば海路の日和とやら」といふ古諺の通に行つたなら、余は數萬海里を行けた程であつた。當分余は猶ドーチエスターに逗留して居た。そして我々の着後二週間目に自餘の公民捕虜が再び遠く運送せられた時、余はドーチエスターの兵士收容所に殘留する事が出来る様に取運ばれたのであつた。

併し余は是迄居住した營舎を去て、厩の一小室に移住したが、此處で曹長より親切に歓迎せられた。

此室内の生活は一種獨特のもので、茲に在るものは皆友情極めて温かであつた。上述の曹長以外に余の同僚は體軀巨大なバイエルン近衛聯隊歩兵科のもので綽名はシヨールシユといひ同時に料理人であつた男、生れはロートリングンで平時は巡查

を業とする活潑敏捷な標騎兵の上等兵、それから二人の立派な長身で見上ぐるばかりの體格の衛兵射手（金髮碧眼の純フリースランド人）等であつた。一週間後には更に七人目の客人が見えたが、之は海軍少尉候補生であつた。此人は飛行機觀望者として廢棄せる飛行機に乗り四十時間以上も漂浪した揚句、北海で飛行機諸共英國人に拾ひ上げられたのであつた。

此室内に於ける各人の關係は全く理想的のものであつた。是等の戰友等はすべてマルヌ戦後の大退却の折に捕虜となつた人達であつた、そしてこんな立派な軍人にあつては當然豫期すべき事ではあつたが、彼等は重傷を負ふて敵手に陥つたのである。彼等は優れた確乎たる意見を有し、熱烈の心情を持ち、燃ゆるが如き愛國心を抱いて居たので、余は是等の人に接して歡喜の餘り、胸がこみあげて來たのである。夕方の如きは特に氣持ちがよかつた。非常な熱心で子供の様に歡喜して我々が毎晩數時間の間、自から組み立てた板の上で自から調へたキルクの小馬を以て小馬遊び

をして居た様は是非共讀者諸君に見せたかつたのである。

それから種々の雑話が始まつて來ると、自分は何とも言へず面白かつた。

余に取つては何れも清新な事實であつた、余は漸く確實な實戰者の口から、我軍の勇戦せる狀況や大勝利の事を聞いて一身上にも幸福を覺えた。

毎日午後三百名乃至四百名の捕虜が、例の如く英國兵士に嚴密に圍繞されて散歩運動に伴ひ出された。余も同行したことが度々あつた。其道順は此美しくしき小都市の中央を貫通し、それより大弓形を描いて其自然の美に富める郊外を通り抜けるのであつた。其間市中を往復する毎に、我々は特別の力を込め熱烈に「ラインの守り」及「光榮高き獨逸國」を高唱した。讀者諸君はクルツク將軍の下に我勇壯な若者、我が戰勝者の三四百人を想像して見給へ、それが如何に痛快であつたらう！英國の人民は此場合にも其態度が誠に一點の非を鳴らすべき個所がなかつた。幾重にもなつて彼等は町の兩側に立つて居たが、どこにも罵言がましき言語や脅迫がましき舉動だに

見なかつた。曹長は余に極めて嬉しい一挿話を語つた。それはオウエン少佐とミツチエル大佐とが新たに此收容所の長官に任命せられた時、其妻君連は夫婦が武装せずには、然も十二分に武装せずには獨逸の蠻人の中に行けぬなど、熱心に説諭したといふのである。然も此老年將校は其見解に於て毫も異なる所なく、身に寸鐵を帯びずして來たのである。然も……食ひ殺されはしなかつた。數日の後兩人は妻君連に斯う言つた「御身も亦一度は收容所を訪問して、獨逸の兵士等は決して英國新聞が拵らへ上げる様なものではなくて、實際は全く温順な人間であるから、一度其人達を見るが宜い」

すると言ふ迄もなく婦人連は最初は吃驚の餘殆んど氣絶せんとした。然し色々説明せられ、又澤山の衛兵を同行させるといふ保證があつてから、彼等は夫婦の事務室に入來り、上の窓から獨逸兵等の動作を見やうとまで氣が進んで來た。此訪問が知れ渡ると、沈黙の中に我が男子歌謡會が天才ある青年音樂家の指揮の下に其窓下に

集合し最も美しくしき聲樂を歌ひ始めた。すると婦人連は感動のあまり物が言へなくなり、窓に進み行つて、深刻な哀感に襲はれいたく號泣したそうである。それからといふものは彼等は屢々訪ねて來、彼等に依り我々も多くの利益を得たのである。

も一つの話も可なり面白いものである。或る新任の大佐が此收容所に來た事がある。初めて檢視を行つた時彼は甚だ重々しい武装をなし、前にも後にも一人宛の銃劍をつけた兵士を従へて居た。彼はミツチエル海軍大佐やオウエン海軍少佐が全然武装もせず又從卒も同様に居るのを見て、不注意といふ廉を以て此上もない譴責を彼等に加へた。

併し彼は間もなく態度を改良したのである。

或日此新來の指揮官が他の兩將校を呼び寄せ、戰慄しながら斯う言つた「考へても御覽なさい、昨日新捕虜が數名來たのですが、私に通報せられた所では彼等は風を持つてゐる相です！こんな忌々敷い事は是等獨逸人なればこそある事でせう」それ

を聞いてミ海軍大佐は穩やかに側に起立せるオ少佐の方に向ひ、

「オウエン君、君は我々兩人が此前戦役に在つた時恐ろしく澤山風に取りつかれ、殆んど動けなくなつたのをまだ覚えて居るかね」斯う言つた。すると新任の指揮官は口が利けなかつた。そこで余が附言して置きたいが、此大佐は如何にも大佐ではあつたのだが、今日迄決して何處でいも軍事的活動をした事はないのである。こんなものも亦英國に於てのみ見られるのである。

三月末頃余は漸く郷里から最初の通信を入手した。千九百十四年七月開戦の少し前に余は郷里から六月附の最後の報知を受けたのであつた。今や漸く殆んど九ヶ月の後第三回の音信に接した譯である。

讀者諸君は余が此の手紙を受取り、初め莞爾として開封することを躊躇した時にどんな愉快な氣持がしたかは想像に難からぬであらう。余の兄弟も親戚もすべて將校であつて、開戦後何れも戦場にあつたのである、抑も此手紙は如何なる報知を余

に齎らしたか。此簡単な手紙には余の兄弟等が戦闘と危険とに接したるにも拘らず無事に生きて居るといふ吉報があつたが、又余を痛く苦しめた悲報もあつた。それは余の愛する温和な小妹が、余の最も信する友たり仲間であつた小妹が戦争の影響の爲めに死亡したのであつた。

噫悲惨な戦争の運命！

三月の末頃に、漸く余を將校として承認し、將校宿營所に移送するといふ命令書が余の手許に來た。そこで間もなく余の僅かの小荷物とホッケイ用の棒とを結束し、忠勇な同僚に心からなる告別をして、余はオウエン少佐と共に門の方へ出て行きそれから停車場の方へ進んだ。

此老人將校の氣轉の利く事は特に余の利益になつた。數時間も旅行すると我々は倫敦の近くのメーヅンヘッドに到着し、此處で余は別の英國士官の手に渡された。それから此處で又不思議な事に余は再び舊知に邂逅したのである。といふのは其の

昔或る錠前屋、後の城主なるエルンスト、ゾーゼーといふものから奪取せられた五個のピカ／＼する圓き亞米利加金貨が余の此同道者に交附せられ、懸て又余が今度將校であつたので、有無を言はず余に手渡しされたのである。

余と彼と再び相見たとき其喜びは甚だしいものであつた。

我々は自動車で俘虜將校收容所たるホーリー、ポートに行つた。番兵は捧げ銃をした。鐵條網は開かれた。余は喜色を其面上に湛へる同僚の一集團に取巻かれたのである。然り誰れが此再會を豫期して居たであらうか。

余が正に九ヶ月前青島で最後に會つた人々、コロネル沖の戦勝者、フォークランド島沖に於ける少數の生存者等と余は此處で端なくも再び對面したのであつた。其喜びは逆も他人の想像し得ざる處であつた。一別以來の珍事異聞を問ひつ語りつ底止する所を知らかつた。それから又余に取つて駭心瞳目ともいふべき事件が起つた。余が部屋に案内せられて見ると、どうだらう六箇乃至八箇の寢臺、然も白く綺麗に

敷きつめた本統に立派な寢臺があつたのである。余は著英後早々雑兵同様に牢獄中に全く八週間も拘禁せられた爲め、今初めて立派な寢臺を見たのである。余が此夜如何に感謝の意と敬虔の情を抱いて、その温褥の内に横たはつたであらうか、讀者諸君は果して余の心中を想像さるゝであらうか。

余は當所に到着後、初めの數日間は丸で極樂世界に居る様に萬事愉快に思つた。特に此處で著英以來初めて人間並の取扱を受けたので一層其感が深かつた。余は再び同僚の中にあつて、幾多の敬愛する友と握手し快談笑語に日を暮し、行住坐臥の間に於て貴重な精神的の刺激を獲得したのであつた。

當收容所の取扱は甚だ善かつた。其指揮官は理解のある男で、我々の生活を慰籍するのにも最も骨折つて呉れた。

但し其建物と云つたら古き幼年學校の所有家屋であつて、全體では此收容所には約一百名の獨逸捕虜將校が居て、一室内に八人或は十人までをを定員として抑留し

たのである。

是等の各室は寢室兼居間であつた。其他に猶ほ彌撒室、讀書室、食堂等があつて、戶外運動の外我々は大抵此處に滞在して居た。食物は純英國式、これが爲め多くの獨逸人の口に合ひ兼ねたが、併し其品質は良く其分量も亦豊富であつた。最初は我々自身が交番で割烹に當つて居たので、此事は幾分改善せられて居たが、後には不幸にして英國陸軍省の禁止する所となつた。

我々の一舉一動は終日多く干渉せらるゝ所はなかつた。我々は建物の内外殊に其周圍の恰好な庭園中を自由に逍遙する事が出来た。毎日午前十時に檢閲が行はれ、夜分は十時に消燈、それから巡視があつた。

當所の構内は全部鐵條網を以て圍まれて居たが、之は日夜番兵が厳しく立ち點燈せられて居て、我々が接近することは勿論禁せられて居り、況んや此留置場を離れる事は出来なかつたのである。併し唯午前と午後だけは此障礙物が開かれ、英國

兵士の二列に立つて居る間を通つて二百メートルの距離にある遊戯場に行くことを許された。我々の遊戯運動には模範的な注意が拂はれてあつた。二つの立派なフットボール場、就中ホッケー場が我々の専用に供せられてあつて、我々はそこで常に英人をも驚かす程の遊戯をしたのである。最も此處も亦針金製の柵や番兵の取圍む所となつて居たのは言ふ迄もない。

毎週二回宛仕立屋及上等衣類の供給者が當所に訪ねて來て之に依り我々が當り前に服裝を整へる事が出來たのは甚だ氣持ちがよかつた。

我々は給料として月給百二十馬克(六十圓)を受けて居たが、其中で六十馬克だけは毎月我々の賄に差引かれ、殘餘の六十馬克丈は我々の自由に消費し得る所であり、亦本國より此地に金錢を送つて貰ふ事も出來た。郵便の發着は遺憾なく行はれて居た。獨逸からの手紙は大概規則正しく到着し、全體では六日から八日を要した。小包も同様であつた。

此方から差出す手紙は頗る窮屈に規定されてあつた。毎週僅かに二通の信書で簡單な規定通りの短文を認め得るのみであつた、我々が其折數時間に亘つて故郷の血族共に述べ立てる事が出來たら、どんなにか嬉しかつたらう！嗚呼郵便、之が我々の爲め唯一の快樂にして同時に敵味方共に全體のものであつたのだ。我々は常に手紙を投函する都度、往返に要する全日程を數へ、我々の魂は手紙の後を追ふて居るかの様に其返信を待ち詫びて居た、畢竟此收容所の空氣は一に郵便に依つて動いて居たのである。

我々の生活は毎朝同一の光景が繰り返された。通譯將校が手紙を携へて來ると、一同は立つた儘座つた儘で、萬事を忘れて居たのである。英國將校の周圍には、待ちに待てる人々が音をも立てず控へて居た。各自其心の中には今日といふ日は、郷里からの通信、愛する人の書いた音信が來れば宜いがと熱烈に祈願して居たのである。それだから何か來て居たら其喜悅は譬ふるに物がない程大きい、其反對に手

を空ふして退ぞかなければならなかつたら、其悲嘆と失望とが、何れも甚だしいものであつた。後者の場合になると、我々は常に斯う言つたのである。「また一日損をした！」

余が其後約二ヶ月を過ぎて獨逸國に歸り、戰時捕虜を喜ばす方法は如何と各方面から尋ねられる毎に余は常に斯う言つた「お書きなさい、お書きなさい、出来るだけ手紙をお書きなさい、捕虜が一番待ち詫び戀ひ慕ふのは手紙でありますよ」

我々俘虜將校の共同生活は其境遇相當に極めて友情が厚いものであつた。殊に夕方などは一同大集團をなして立派な大暖爐の廻りに座り込み甚だ愉快の談笑を交へた。大きな木の丸太は盛んに燃えて居り、戰鬪や勝利、苦痛や死滅、其他殺伐冒險の經驗などを互に話し合つて娛しんだ。夫から面白い書籍や美術音樂に關すること（之は我々が設けたものである）は一同の知識に貢獻する所が頗多大であつた。

又屢々滑稽な事も演せられた、そして時折りこんな風に腹の底から笑ひ興すると、

漸くに我々は寛ろいで蘇生の思をなし、少しの間だけは拘留といふ痛ましい壓迫を蒙り居る境遇を忘れたのである。

四月末になつて我々の愉快な此共同生活は突然に攪亂された。

或る夕我等約一百人の將校中五十名は翌朝ドニントン、ホールの將校宿營所に轉送するといふ命令が來た。我々一同の昂奮は甚だ盛んであつた、といふのは何人も此處を去るのを欲しなかつたのである。併し我々が如何に懇願し如何に抗議しても何等の効果もなかつた、其命令は單にトランクの荷造を濟し、出發せよといふのであつた。かくて移動する人々が一緒に立ち去つた後、唯一人の海軍將校は悲しい哉余だけであつた、然もそれは英國の收容所指揮官の特別の命令に基づいたものであつた、蓋し彼は余が倫敦の近くに居るは餘りに危険だと思つたのである。

自分が出立すると余の親友ジューベル（陸軍飛行家）も亦加はつた。そこで少くとも我々二人の飛行家は離れずに居たのである。

我々移動員は五月一日に出發した。各々五人づゝ自動車に乗り込んでメーアンの
ツドの停車場に來たが、既に二つの特別列車が我々の爲めに準備されて居た。車室
内では我々は他人に妨害さるゝ事もなく愉快に過したが、勿論車室は兵士が嚴重に
警戒して居た。

汽車は數時間此地方を一直線に北方へと馳せ去つた。停車場の群衆は如何にも好
奇の眼を睜つて我々一同の車窓に見惚れて居たが、併し彼等は全然穩やかな態度を
示して居た。唯一名の老婦人(之は明らかに平時は婦人參政權運動を職として居た
のであらう)が時々其餘り美しくしからの舌を出して我々に向け揶揄の意を表して居
た。我々一行は午後漸くダアビーの附近なるドレーニングトン、キャツスル停車場に着
した。我々は車から下り、隊を整へて停車場の構内に立つた。夫れから約六七十年の兵
士に取り巻かれて「速歩進め」の號令の下に行進を始めた。停車場を出ると我々の前
には群衆が大に吠え叫んで居た。其殆んど全部が婦人、丁年未滿の男子及子供等であ

つて成年以上の男子は少なかつた。一行の中大部分のものは佛蘭西以來こんな群衆
の取るに足らぬ振舞には充分慣れて居たのだが、英國では之は稍や珍らしい事であ
つた。下等社會に屬する婦人や若い娘共は丸で野蠻人の様な態度をして騒ぎ廻つて
居た。彼等は吠えながら叫びながら我々の前後左右を擁して狂奔した。時々是我々
の列の中に石を投げたり、道路の汚穢物を投じたりした。併し全體から言へば前述
の婦人等が竊に煽動した結果かゝる振舞をなしつゝ笑ひくづれ、咆哮をして非常に
楽しんで居る様であつた。町の第一の曲角の所で我々の後方から自動車が一臺や
つて來た。其舵取の場所に我等一行に附屬せる身體肥滿の傲慢な英國通譯將校のマ
イヤー氏が乗り込んで居たが、此男は後日我々が其人物の程を充分に知つたのであ
る。マイヤー君は我々に見せつけやうとしてブーブー……人込みの中を遠慮なく
轟進したので、遂に我々を護衛して居た彼の部下の一兵卒を引き倒したのである。
そこで群衆は叫聲を發し罵言の言を放つたが、誰一人として何事をも企てるものは

なかつた、結局我々「橙人」の二人が飛び出で、その不幸な兵士を自動車の下から引き出して救助したのである。

これを見て婦人連はマイヤー君に對して甚だしき憤怒の相を示した、そして其時若し彼が逸早く乗り過ぎて行かなかつたら、彼等は或は彼を毆打したかも知れなかつたのであつた。彼等がそれを爲さなかつたのは如何にも遺憾であつたらう。所が此出来事は間もなく忘れられて、群衆は再び叫喚を續けて、愈々傍若無人になり、益々汚穢物を我一行に投げつけて居た、折しも突然——從容として愉快げに頭を垂れて我々に反芻の稽古を示しつつ、牛が四五匹我々の方へと進んで来て、我一行の通路の兩側を塞ぐやうになつたので。其時に起つた事と言つたら、それはく奇々妙々で、我々は英國兵士に對して、腹を抱へて大笑したのである。今迄あんなに元氣であつた婦人連、牛を見るが早いか恐ろしく泣き聲立て、喚き出して、廻れ右、勢猛にそこから逃走した。弱者は强者の爲め何の遠慮もなく衝き廻はされ、躓て小兒等は啼



倫教に於て浪生を營む者

り狂ふ婦人連に推倒されて町の兩側の溝の中に蹴落され泥中に陥り込んだものも多数であつた。

其時より以後は我々一行の周圍が靜穩になつて來て、何等侮辱せらるゝ事もなく可なりの速歩で行進を續けた。

此行進の際余は道路及特に目標となる點を一つ一つ厳しく注意して置いた。素より何時それが役に立つか分らなかつたからである。

此日太陽は赫灼と蒼空から照りつけて我々の身體を焦して居た、我々は熱汗の中を泳ぎながら一時間半の後、我々の新居ドリーニングトン、ホールに到着した。

此處は規律が行き届いて居た。表門と鐵線障礙物とが開かれ衛兵全部が捧げ銃の姿勢で整列し、右翼に衛兵指揮官と中尉二名とが擧手の禮をして居た。

我々は同收容所司令官に面會した上で、各自分室に案内された、余は幸に四人の他の同僚（其中には勿論親友ジーベルも居た）と共に氣持ちよき一小室を得たので

ある。

此處でも余は多數の舊知己に再會した。かの「ブリッヘル」艦や水雷艇や小巡洋艦の生存者及多くの陸海軍飛行家が居たのである。

ドーニングトン、ホールは英國の模範的捕虜收容所であつた。我々が是迄何週間も英國新聞を読んだ所から見ると、之は殆んど樂園かと思はれた、日々新聞紙上には政府攻撃の爲め一欄にも渉る論文が出て居て、政府は獨逸捕虜を餘り贅澤に優遇して居るなど、滔々論駁する人が多かつた。此件に關しては婦人連も亦相變らず極めて擗猛な態度を示した程であつた。實にドーニングトン、ホールの掃除勵行を英國の婦人問題とまでなしたのである。國會も亦此問題を再三再四論議した。彼等の主張する所にては、此處には遊戯室や多數の玉突臺があり、建物は丸で城の様に整頓が出来て居り、又將校の爲め特に狩獵區が仕切つてあつて、獨逸將校の爲め實に狐獵が屢催はさるゝとの事であつた。

之は何れも眞實の事ではなかつた。成る程ドーニングトン、ホールは十七世紀に建てられた一大古城であつて、廣大な古庭園を繞らしては居たが、我々の收容室は全然無一物で室内設備の如き殆んど考へもつかぬ程に原始的であり且つ不良のものであつた。其他玉突臺、遊戯室、狐獵などは影も形もない事であつた。併し居住上には萬事遺憾なく清潔であつて、此點は英國指揮官が模範的の注意を加へて呉れたのである。我々が到着すると全體では百二十名の將校となり、各室とも既に最早一杯に詰め込まれて居たのである。然るに此收容所は四百名乃至五百名を收容する計算がしてあつた。そうなると一大面倒が起る事であらう、といふのは、今日ですら食堂や賭方や浴場や其他の設備は不足であつたのである。

我々の都合から言へば、同所の立派な庭園は殊の外愉快な所であつた。

當所に在る我々俘虜將校は二部に區分されて其滞在所を分つた。片は即ち所謂晝の部と夜の部とであつた。是等の區域は頑丈な鐵線障礙物に依つて區劃せられ、一

部分は電流を通じてあり、夜間は強き孤光燈を以て照らし、晝夜とも番兵が厳しく警衛して居た。

夜の部の鐵條障礙物は此家及其前面の庭球場及運動場を圍繞して居り、晝の部は庭園にまでも擴延されて居た。

日常の生活を述べて見ると、毎日夕方六時に大檢閲が行はれ、全員は必らず一所に集合すると、晝の部は閉鎖せられ、翌朝八時が來なければ再び開く事はなかつた。

ドーニングトン、ホールに於ける生活はホーリー、ボートに於けると全く同様であつて、唯一の相違は此地にあつては庭園内に於て遙かに多大な運動の自由があり、苟しくも可能なる場合には茲に多くの競技を演じ、且つ三つの上等な庭球場をも有して居た事であつた。食事は此地に於ても亦純英國式で多くの人の嗜好には投じなかつたが、品質は亦良好で其分量は豊富であつた。當收容所長たる某大佐は禮儀正しく且つ物の能く分つた人であつた。成る程彼は時には怒號することもあるし、可

なり軍人らしい處があつたが、上品で理解力に富める人物だから縦から見ても横から見ても申し分のない好箇の將校であつた。彼は我々をして此苦辛多き運命を軽減せしむる爲め、あらゆる方途を講じ、殊に我々の競技的遊戯には多大の興味を持つて呉れた。我等に取つて之が最も都合のよかつた事柄であつた。

茲に我々に最も不快を感せしめた男は通譯官たるマイヤー中尉（例のでぶ肥りの自動車乗り）であつたが、彼は正にかの「アンダニア」號の例のマクスステットと好一對の俄將校で、彼は唯に「一時的の中尉」たるのみでなく又「一時的の成金紳士」であつた。此男はフランクフルト、アムマインから出たもので、戦前には油脂場の支配人であつたが、其一舉一動彼の下劣な性格を現示しないものはなかつた。當收容所長たる某大佐も亦此男を侮蔑して居たと余は竊に思つた。そして彼の英國軍曹（その人と我々は時々酒保で語り合ふ機會があつた）も文字通り斯う言つた「我々英國將校はすべてマイヤー君の様であると信せられては困る次第だ」

六月末頃である。或日の夕方に我々は面白い経験をした。彼の鐵條網の外方には澤山種類がある群鹿が居て、時々何百頭と群がつて現はることも度々あつたが、彼等は丸で山羊の様に能く人慣れて跳ね廻つて居た。

其日夕方に極めて可憐な一頭の鹿の仔か母獸を見失ひ鐵條網の所を走り過ぎて居た。が、我々が手招ぎしたり呼んだりしたので、仔鹿はその障礙物を巧みに匂ひ抜けて、收容所に入り込んで來た。我々の喜びは大したものであつた。全く大騒ぎとも言ふべきであつた。大供はそれを取り巻いて撫でたり擦つたり（狩獵家共は唸つて居た）して居たが、結局凱歌を擧げて一中尉の腕に載せ従卒室に運んで行つた、そこには狩獵家の一人が居て、此仔鹿を養育して見るといふことになつた。

所が何處で此事を聞き附けたものか知らぬが、例のマイヤー君は兎に角獨逸側の收容所副官を召喚して、驚愕せる如き聲を出して尋ねた。

「S中尉、收容所内に動物が居るといふのは事實ですか」

「そうです、動物が一匹！」

「鐵條網を突き抜いて來たのですか」

「そうです、容易に突き抜けて匂ひ込んだのです」

「之は實に驚くの外はない！」とマイヤー君は言つたが、彼の聲は消ゆる様であつた。

「それでは私はその穴がどこにあるのだか、どこからその大きな動物が匂ひ込んで來たか直様調べて見なければならぬ、屹度獨逸將校が脱走する爲に鐵條を切斷したに違ひない。その動物も亦即刻取り去らなければならぬ！」

そして間もなく其遺憾が事實になつたのである。

全く戲談ではない、倏忽銃劔を附けた衛兵二十名が呼子笛で召集せられ、其中に罪のない極めて弱小な鹿の仔を持った獨逸將校を取り巻いて、此一隊は「速足進め」の號令で障礙物の内門に行進したのである。それから内門が開かれ、二十人の兵士

は獨逸將校と鹿の仔とを伴ない、中間部（所謂水閘）に進み、内門は注意深く閉鎖せられた、其上で漸く外門が開放せられ、兵士は仔鹿を放免し、それから此行列は歸つて來たのである。嗚呼マイヤー君、君は如何にも世の笑草になる様な馬鹿げた眞似をしたではないか。

それから英兵等は障礙物全部を注意深く検査したが、人の匂ひ出る様な穴は極めて小さいのも發見せられなかつたにも拘らず、マイヤーは終日心安からの態であつた。

我々は毎日郵便以外には新聞を受取るのが其日の大切な時刻であつた。而して「タイムス」と「モーニング・ポスト」とを見るのを許されて居た、是等の新聞紙は唯聯合軍側の勝利をのみ報道しては居たが、間もなく我等は新聞を充分に理解して來たので、我々は之を讀んで大體の事實を精密に推察される様になつた。

「ルシタニア」號が沈没した時英國の新聞紙は大に憤慨して居た、又露國兵が（無論唯戦術上の理由からではあるが）遠く退却した時の如きは新聞紙は酷く苦悶して

居た。

我々は甚だ大きな、然も微の微に至るまで精密な交戦地の地圖を數枚造り上げ、毎朝十一時に我が「參謀部員」が仕事にかゝつて小旗を刺したのであつた。屢々當所長たる英國大佐でさへも其前に立つて、意味有りげに頭を振つて居た。

十二 暗夜の逃走

余は月日の経過するに伴れて禁錮の天地に辛抱することが出来なくなつた。郷里からの手紙も、我が愛する人より送らるゝ多くの立派な小包も、毫も余を慰むるに足らなかつた。且又我親密な同僚等が、夜分に疲れ切つて死人の如く熟睡する程に熱狂して遊ぶホッケーの遊戯も、余には更に面白味がなかつた。

此悲痛慘憺たる俘虜生活を營む間は、何物も余を悦ばす助けとはならなかつた。あらゆる遊戯やあらゆる運動の如きも、すべて徒勞に屬した。

從來俘虜の境遇程惨めなものはない。天涯萬里の異域で國を憂へ家を懐ふの情は涙と共に盡きぬのである。何人も一たび此苦海に投ずると、遂には同様の悲哀に陥つた様に自分も亦捕虜病に罹つた。昔暴虎憑河の勇士も、今は籠中の鳥と化した、翹上

の魚にも劣る。かくて余は限なき絶望と、落膽との病氣とが犇々と身を襲ふたのである。

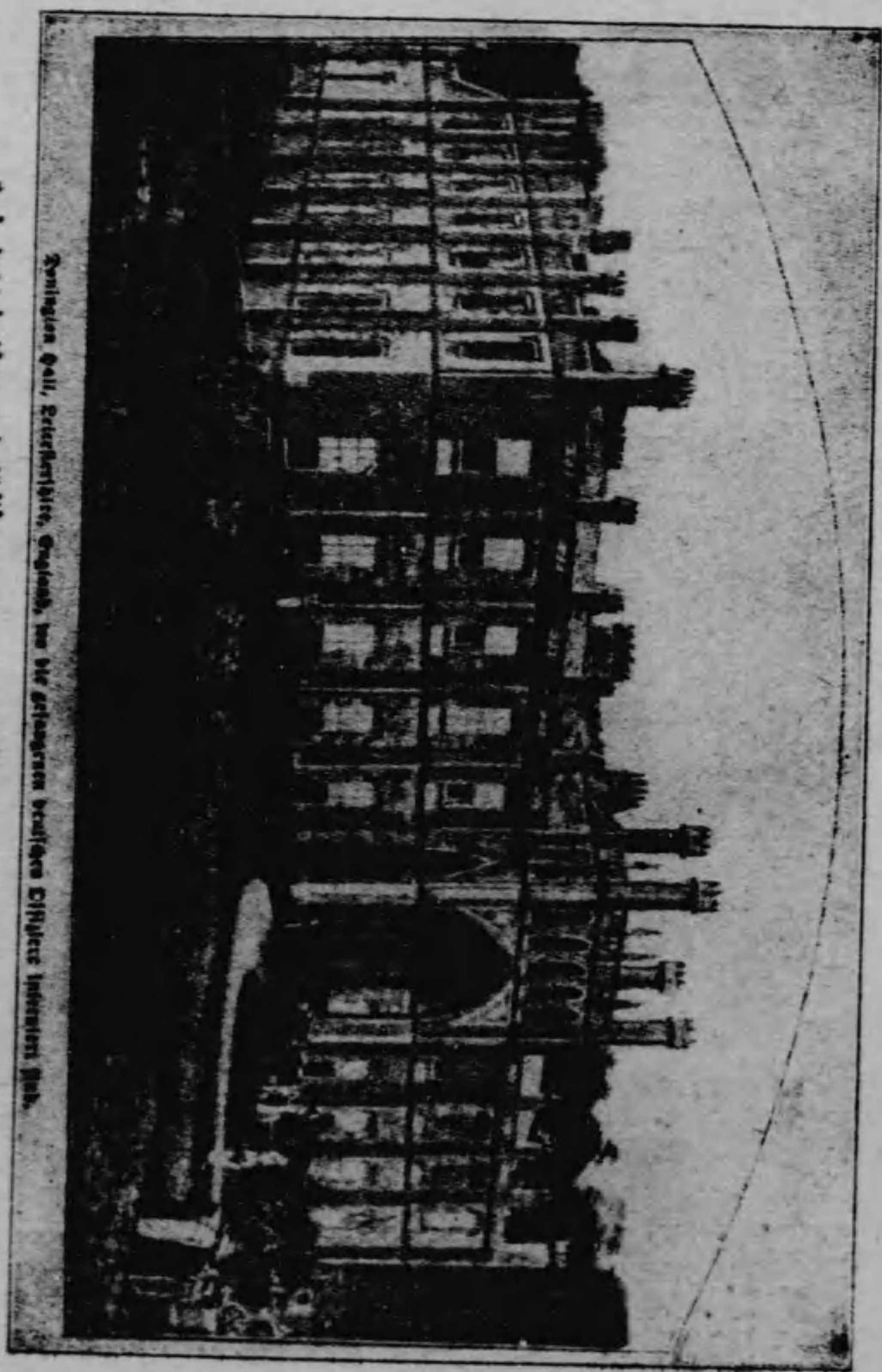
吁！何等慰むべき途もなかつた！

余は斯く感ずる毎に、數時間も他の人々同様草原の中に轉がつて煩悶し、大きな眼を開いて蒼空をヂツと見詰めるのであつた、すると余の心魂は空に浮べる白雲の方に憧れ、それと一緒に遠き郷國へと彷徨ふて居た。此とき若し英國飛行家が靜かに且つ確實に蒼空を飛んで居るのでも見ると、余の心臓は痙攣し、荒廢せる頭腦は益亂れ、其舉動は漸く自暴自棄となり、失神の極知らず識らず自體を激動させた。余の心身に關する此状態は時々刻々悪しくなり、神經は頗る過敏で、或は同僚に對しても怒り易く且つは冷酷になつて來た。斯くて余は精神的にも肉體的にも漸く衰弱を加へて來た。然も猶此場合に在て余の多少満足を覺えたのは、幾多の先輩同僚と相集合して寢食を共にし談笑を交へ且つは偉大の教訓と貴重の經驗とを嘗めたこ

とであつた。唯戦友中茲に捕へらるゝものは、悉皆戦敗の結果に由るのではない。實際他の多くの人々は現戦争の初期に負傷して敵手に落ちたのである、取り分け不幸なのは開戦の當初に、遠く米國に在つたので、其所有財産等を悉皆抛擲して母國の危急に應せん爲め、出發の途中、未だ郷國に達せざる際偶英國の反間に依り脆くも捕虜となつた人々である。

此頃獨逸國から何等の戦報が來なかつたのが、我々の氣分を非常に害して居た。勿論我々は英國新聞の虚偽の報道を信じなかつたものゝ、然も毎週毎日引つ切りなしに獨逸に對する中傷がましき記事や、獨逸の敗軍、革命、飢饉の通信ばかり讀んで居ると、何時とはなしにそれが我々に強き影響を及ぼすのであつた。不確實といふ事は此處でも最大苦痛であつた、殊に伊太利の卑劣な背信の報道は我々の頭腦に烈しく響いたのである。

其時英國新聞紙の凱歌の聲は實に凄じかつた！



Sonstigen Fall, Zeitungsdruck, England, im der ersten Druckerei Eiliger Industrie.

ルイボントグンニード州ヤンセーレ國英るナ所容收(校將逸獨)應存

余は之を聞くと遂に忍耐が出来なくなつた。若し自分が全然自暴自棄の深淵に陥るのを欲しないならば、何等かの方策を講じなければならなくなつた。

如何すれば此悲惨な境遇から脱出し得らるか、余は日夜此事を思案し、煩悶し、熟考した。それで色々な方法を屢案出したが、其都度再び抛棄しなければならなかつた。何等かの成功を期するなら、充分の沈着と熟慮とを以て此仕事に取り掛る必要を感じた。

余は此構内で何時間も障物物の設けてある各所を行きつ戻りつして、人に知られぬ様に針金も杭も一つ／＼観察した。余は了解できる迄、一つ／＼の場所の近くに在りて何時間も草原の中に横臥して、恰も熟睡せるかの如く装ふて、實は鋭どく遠近の物體や道路や各所に於ける番兵の舉動や習慣や癖などを充分に注視して居た。

かくて自分が鐵條柵を越え様と思ふ個所は確に知ることが出来た。そこで今度は一旦此障物物を飛び出した曉如何にして遠く脱走するかといふ事だけが更に思考を

費すべき問題となつた。我々俘虜は英國の地圖も持たなければ、又コンパスも旅行案内もなく、暗夜の旅行に必要なものは何等の補助方法もなかつたのである。又ドリーングトン、ホールの正確な位地さへも全く不案内であつた。されどドリーングトンキャツスルまでの道は充分に心得て居た、余は嚮きに當收容所に移轉の際歩行して來た爲め、最も綿密に自分の心に銘記して置たのである。又或る日偶然ドリーングトン、キャツスルからではなくて、ダービーから自動車で來た一將校があつた、自分は其後からダービーはドリーングトン、ホールの北方約二十五乃至三十キロメートルの所にあること、及自動車がその村に曲り込まない中に大きな橋を一つ通過したことを聞いた。それから自分は年老いた寛大な一英國兵士と知り合ひになり、時々彼に葉巻煙草の五六本も恵んでやり、且つ機會があれば彼を酒保に伴いて茶菓を與へ、麥酒を飲ましたりした。我々が數回會合した折節、余は彼に向ひ君は何時もドリーングにヂツとして居るのは極めて退屈に違ひないだらう。何か面白い境遇の變化

はないのかと彼に尋ねた。すると彼は

「ありますとも、私は時々自転車に乗るのです、そして活動寫眞を見る爲め自転車でダービーに行く事がありますよ」と誇顏に答へた。

「なに、ダービーだつて？」余は斯う言つて彼に問うた「それは君には餘り遠方過ぎるよ、それをするには君は年を取り過ぎてるよ！」

「私が？年を？どう致しまして、貴方は此點に於て英國兵士をよく御存知ないので、自転車で乗りさへすれば私は若い奴等に負けは取りませんよ、そして三四時間すればダービー迄の道は終へて了ひますからね」

此日余は得る所が澤山あつた。次の週間余は再び此老ひたる友に出會つた。我々は相互に感慙に挨拶し、余は又例の葉巻を二三本彼の手に推しつけてやつた、元來余は禁煙者であつたが、常に葉巻は身につけて居た。

「オイ、君、一寸」余は突然斯う言つて口を切つた「僕は昨日友達と賭をしたんだ

よ。其賭といふのは僕がダービーは北の方角にあると主張すると、友達はなに南の方にあると言ひ張つたんだ。僕が勝てば君も一緒に大瓶に麥酒一本飲めるのだが」此酒好きの眼は喜悅の相を帯びて光つた、彼は神かけて保證して斯う言つた。「それは貴殿の方が正しい、ダービーは間違ひなくドリーニングトン、ホールの北方に位するのであつた」

そこで余は一點の疑もなくダービーの眞位置を確めた。

余の海軍同僚の一人たる海軍中尉トロッパ（此男は立派に英語を話し又英國を正確に知つて居た）と共同して、余は逃亡の計畫を斷行しやうと決意した。

我々兩人は千九百十五年七月四日を以て陰謀舉行の日と定め、著々其目的で豫行し其方法も都合よく進捗して、あらゆる準備を整へた。

七月四日の早朝トロッパと余とは病氣届をした。

十時の朝の検閲の折に我々の姓名が呼び出されると病氣といふ報告があつた。す

ると検閲が済んで當直の軍曹が我々の部屋にやつて來たが、我々は病氣の體で就眠して居た。

陰謀の前提はすべて秩序整然として遺漏の點を認められずに居た。

其日の午後が刻々近づき、斷行の時間が漸く逼つて來た。

四時頃になつて余は着衣を改め、逃走するのに必要と考へたものをすべて身に着けた。大きなバター附パンを數個食ひ、それから余の同室の人々に告別し、殊に不幸にして同伴するを得なかつた余の親友ジール（彼は海軍將校ではなかつたし、英語を少しも話せなかつた）と熱き別れを交はした。

此日戶外には暴風雨が起つて居て、驟雨の如き雨は大空から土砂降りをして居た。番兵共は皆濡れに濡れて戦慄しながら哨舎の中に立つて居た、それが我等兩人の捕虜將校が此大雨を侵して庭園内を散歩する氣になつたといふ珍事が何等の注意をも引かなかつたのである。庭園には灌木に包まれた洞穴があつて、そこから我等は他

人に見らるゝ事なくして庭園全部と鐵條柵とを見渡すことが出来た。

此藪の中にトレフツと余とは匍び込んだ。

それから我々二人を庭園のベンチで匿して呉れたSと簡単に告別した、そこで我々は二人限になつた。

夫より後余は唯神明と天運との好意に委ぬる外他の方法を認めなかつた。

我々は呼吸を殺し氣を張り詰めて待つて居た。斯うなると、一分時も永晝の様に思はれたが、光陰は徐々として然も着々に一時間一時間と過ぎ去つて行つた。高塔の時計が音高く明瞭に六時を打つと我々の心臓は烈しく鼓動し始めた。我々は檢閲の爲めの鐘が鳴るのを聞き「起立」といふ號令を耳にした、すると高い響きを立て、晝の部の鐵條網が閉鎖された。其時我々は恐怖に滿てる十五分間を過ごした。我々は全然呼吸さへもしなかつた。今にも我々の人名を呼ばれるかと思つて居た。已に六時三十分となつた。されど可事もなかつた。ツクハの氣味が斬く我々の心から脱れた。

是は有り難い事だ。第一幕の演劇は甘く成功したのである。實は檢査の際我々の姓名が呼ばれると、今度も「病氣」との報告があつたのである、そして將校連が退散を許さるゝと、同僚の一人は余の爲に、他の一人はトレフツの爲めに、出来るだけ速に建物の後ろを廻つて行つて、我々の寢臺に横臥したのである。そこで曹長が來ると、彼は病人は二人ともそこに居たといふ事を確かめ安心したのである。そこで萬端の秩序が整然として立てゐたから、毎晩の様に夜の部の障礙物が閉鎖せられ、そののみか晝の部の障礙物の番兵も交代した、そこで我々は我々のなすが儘に放任せられたのである。其日に珍らしい大雨が降り、我々は大層仕合であつた、何故と云ふに、若し此大雨がなかつたら英國の兵士達は毎夕庭園を騒ぎ廻るのを好んでゐたから、其際余等の身體が発見されないと限らぬからである。

須臾して時間は時間を追ふて過ぎ去て行つた。我々は沈黙の中に其藪の中に座つて居て唯時々互に指で衝き合つては是迄に萬事が甘く進んだのを喜んで點頭した。

此夜十時半頃になると我々の精神は昂奮して熱血は頭上に集つた。今我冒險なる作業は更に第二の試験に合格しなければならなかつたのである。明らかに就眠の號音が間もなく聞えて來た、そして余の住んだ部屋の開いてある窓から力強く「ライソンの守り」が響いて來た。之は一同八方に眼をくばつて注意して居るといふ合圖であつたのである。

點檢の時刻になると當番將校が軍曹を連れて總ての室を通過し、一人の不足をも見逃さざらんと注視して歩んだ。余は數週間前より觀察した結果、當番將校は巡視後に於て最も近い道路を辿つて其自宅に歸るらしく何時も同じ道を取つて居るのを認めたのである。今日も左様であつた、巡視は先づトレフツの居なくなつた部屋から開始された、此男の寢臺には他の人が横臥して居たのは言ふ迄もなかつた。

「全員揃つて居るか」

「そうです」

「宜しい、お息み、諸君」

こう言ふ風にして巡視は常に進んで行つた。彼等が角を曲るが早いか又他の同僚二人が反對の方向に廻つて余の後に走り込んだのである。それで言ふ迄もなく此處も亦全員揃つて居るのであつた。

我々が此場合如何に心臓の激動を感じたか。如何に精神の緊張を覺えたか。陰謀の成功を望んで切に期待の念に焦がれて居たかは、讀者諸君の判斷に任すこととする。我々は心の中では以上の出來事を全部實行しつゝあつたのである。そして随分と長い時間靜かに忍んで居たので、或は萬事失敗したかとも恐れたのであつた。兩手は氷の様に冷え切り、口は殆んど呼吸もしないで、耳を出來るだけ敬たて、我々はそこにちつと控へて居た。

遂に十一時に音高き喝采が響いて來た。之は萬事好首尾といふ我々の豫じめ約束して置いた合圖であつたのだ。

十三 テームズ河畔の逍遙

我々の周囲は漸く静かになつて来た。有り難い事に土砂降りの雨は止んだが、庭園は眞暗闇の中に包まれて居た。夜の部の障碍物を照して居た大電燈の光力は微弱に輝やいて居た。衛兵小舎の中を行きつ戻りつする番兵の規則正しき歩調は陰鬱の空氣に反響して居た、そして彼等が各十五分毎に相互に呼び交はして居た其聲は頗る陰氣に響いて居た。夜の十二時に衛兵の交代があつて、余はそれを特別の注意を以て見守つて居た。それから當番の將校がやつて来て、角燈で晝の部の障碍物——即ち我々のもの——を照らし見た、十二時半には再び沈々たる夜氣の静けさになつた。今や我々活動の時が来たのである。

余は徐に猫の様に今まで潜伏した場所を這ひ出で、庭園を忍び抜けて鐵條柵の障

碍物の方へ赴いて、實際番兵の有無を確かめた。然るに萬事豫期の如く秩序整然として居り、且つ我々の乗り越えんとする地點を発見したので、余は又忍び歸つてトレフツを迎へに行つた。そこで余は再び其道を一緒に進んだ。

障碍物の所へ來ると、余は今一度穩やかに最後の訓令を加へ、それからトレフツに小さな包を渡した。先づ余が攀ち上り始めた、柵の高さは約三メートルで、鐵條は各二十センチメートル毎に氣持ちの悪い程長い刺金が附けてあつた。

地上約七十五センチメートル迄は電流の通せる針金が備へてあつて、之に接觸すれば、それが漏電して電鐘が自ら鳴り出し、それに依つて言ふ迄もなく收容所全部に警報が傳はるのであつた。我々は刺金を防ぐ爲め皮脚絆を著け、膝には巻脚絆を結び、其他に皮手袋を穿つて居た、それでも刺金は長くて、恐ろしく刺すのであつた。併し之が爲め我々が滑り落ちて電線に接觸するといふ心配はなかつたのである。余は容易く第一の柵を乗越えて了つた。それからトレフツの手より二つの包を受取

ると彼も余に劣らず速やかに亦其柵を通り過ぎた。次には幅約十メートル、高さ一メートルの重い鐵條網があつて、之は最新の工夫に従つて造られたものであつた。我等二人は猫の様に是を飛び越えた。其次には第一のと同じ構造で、同様電流線の備へつけてある鐵條柵があつた。是も亦我々は滑らかに乗り越えて了つたが、唯余が此忌々しき刺金の爲めにズボンの臀部の一端を引き裂かれ、先づそれを取り下ろし再び後に箆め込まなければならなかつたのであつた。嗚呼有り難い之で我々は障礙物には打ち勝つたのだ。

トレップと余とは無言で力強く握手し、無言の儘我々は互に見合つた。大事を爲し遂げた如く兩人は大に喜んだのである。

是から更に他の大なる困難が我々の身に逼り來つた。我々は注意深く暗黒の中を忍びやかに進み、小川を横ぎり、扉に攀ち登り、深溝に飛び込み、收容所の入口の衛兵屯所を密かに通り過ぎた。

その後で我々は漸く自由の天地に出られたのである。

夫より我々はドニントン、キャツスルに通する大道を少しも休まず走り續けて行き、三十分の後に暫らく足を停めて、引き裂けた脚絆や手袋を取り除いた。我等の掌は可成りお立派であつた、足の裏や尻は申す迄もない、其後の一週間許は英國の鐵條の思ひ出は痒ゆく感じたのであつた。

此處で我々は携へ來つた包物を開き、鼠色の平服と雨外套とを着用し、其他の小間物を包み込んで、屈みながらにこ／＼上機嫌で街路を彷徨して進み、恰も夜遅く宴會から歸る人の様に装ふた。ドニントン、キャツスルが見え始めると、我々は殊に自分の舉動に注意した。若し何人かに會ふた時はどうするかといふ事はすべて互に約束して置いた。

丁度我々が村落の大通りに曲り込まうとすると、向ふから英國の陸軍兵が一人やつて來た。號令でもかけられた様に余はトレップを引き寄せ、我々が約束して置い

た通に、戀人同士の眞似をした。すると此兵士は嫉ましげに我々の方を眺め舌打ちしながら、通り過ぎて行つた。彼が我々の側を通つた時に、余は忽ち彼の何人であるかを知つた。彼の袖には三個の曹長角章が輝やいて居たのである、そして此肥満した姿と、四角張れる其眼は收容所の曹長でなければならぬと思はれたのである。

そこで我々は更に急進した。村落を通り越すと幸にかの噂のあつた橋に來た。が此處で我々は危地に陥つたのである。といふのは、三つの大道が此處から岐れて居たので此邊の地理に不案内な我々は進むことが疑はしくなつた。漸く我々は暗黒の中に（英國では甚だ稀な事だが）道標を發見した。幸ひそれは鐵製であつた。そこでトレンツはそれに攀ち登つて凸形の字母を手探りして「ダービー」といふ言葉を讀んだのである。

我々は此上もない速歩で北極星の方に方位を定めて勇ましくそこから駈出した。

我等は人間や自動車かに出會ふ毎に、殊に後ろの方からそんなものが來た場合には、早速大道の溝渠の中に隠匿して、其危険の經過するまで待つて居た。勿論我々は自動車が來る毎に、开は我々を追つかけるのだと信じたのだが、此の如き戦々兢々の態度は誠に無理からぬことであつた。纏て我々は飢餓を覺えたので、携帯して來た鹽豚とチョコレートとを食つた。所が悲しい哉、一方は餘に鹽辛く、他方は餘りに甘かつたので、我々は馬鹿に渴に悩み出した。間もなく是が辛抱の出來ない程になつて、夫から一步も前進する事は出來なくなつて來た。加之、是迄に氣力が張つて居て無理な急激な行進を續けて居たので、身體は非常に多量の汗を生じた。そこで困却の餘り大道の溝渠に立つて、丸で山羊の様に木の葉を嘗めて充分に雨滴を啜つた。或る所で漸く不潔な水溜を見出し、そこで牛飲宜しくの體で過したのである。吁！思へば愉快な事であつた。

夜は徐ろに明るくなつて來た。早朝四時頃我々がダービーの一番取つつかの涼亭

に到着した時不思議に華やかに、巨大な日輪が鮮紅色を呈して地平線上に登った。我々は此壯麗な光景に對して魂魄を奪はれ、恰も神力に魅せられた様に立ち止まつて、握手を交換し、歡喜して太陽の方に瞬きしつゝ眺めた。

オ、太陽よ、彼は正しく我が獨逸國より、若くは我が郷國より眞直にやつて來たのである。鮮血淋漓たる戰場を通過するに當つて色赤く染まつたのである。そして郷國に残れる我が愛する人々より誠心の挨拶を齎らしたのである。此印象は我々の爲めに誠に良好な前兆でなくてはならない。

そこで我々は小庭園に忍び入つて、大化粧を始めた。携帯した衣裳刷毛は不思議に利目があつた。靴磨きの布片は大仕事をした、余のツボンの臀部は携帯の縫針で縫い繕つた。剃鬚用クリームがなかつたので我々は唾液を用ひた、それから顔面は之れも携帯し來たギレット機で細工をした。最後に「唯一箇の」カラーと「唯一本の」チクタイとを巻きつけ、衣裳刷毛と靴布とは涼亭の主人の所に捨て、置いた。それ

から我々は廣縁帽ブロードリムハットに意氣な折目をつけて、丸で伊達者の様に氣の利いた風をしてダッビーダッビーに足を入れたのである。

我々は幸に間もなく停車場を見つけた、そこで人目に立たぬ様に一時相別れたが極めて運よくも十五分を過ぐると汽車が倫敦に向け出發するといふのであつた。余はレイセスター行きの三等往復切符を買ひ、厚い新聞を手にして汽車に乗つた。レイセスターで下車し、倫敦行きの切符を買つた、そして車室に入り込むと偶然余の前に矢張り鼠色の外套コートを着けた一紳士が着座して居たが、此男は何處かで余は見た事があるに違ひなかつた。けれども、勿論余は何等の注意も拂はずに居た。彼の名は以前はトの字で始まつて居たと信する。

正午頃に汽車は漸く倫敦に着いた。

余が改札口を経て切符を渡した時には餘り宜い氣持ちはしなかつた、其際我手は少しく震へて居た。が、檢視官の六ヶ敷い眼光も何事もなくて、數分間には余は大

都會の紅塵萬丈の中に消えて了つた。

今から考へると余が二年前倫敦に滞在して、精細に市中の地理を知つて居たのは誠に好都合であつた。第一に自分のなした事は、四箇處の異なる朝食場に行つて、毫も人の目を引かぬ様に飲食したのであつた、それからテームズ河畔に至り、自ら實見の結果で、あらゆる街路や橋梁や汽船の碇泊場を記憶から呼び起し、特に中立國の汽船は何處にあるかと注意して見た。

自分では是等の諸件を割合に無造作に考へて居たのである。余は即刻汽船が見つけられるものと信じて居たのであるが、棧橋も波止場も十中八九まで中立汽船も等しく厳しき警護の下に河の中流に緊留して居るので、余は一方ならず心配であつた。是迄見た事のない四圍の状態や初めの頃自分を包んで居た不安の氣分や脱出以來最初の間は自分が何人であるかを凡ゆる人が知つて居り、自分がドニングトン、ホールから逃亡したのだと鼻の尖きにつきつけられはしないかといふ感じが絶えず心

に起つたので、余の内心は非常に苦んだ。その上に又今迄經過して來た昂奮状態やら昨夜の無理な心勞や敵の大首都に投げ出されて慘ましくも茫然自失した心情などが酷く自分を惱ましたのである。何某かの新聞を得て汽船の出發を確かめやうとしたが、それも凡て徒勞に歸した、是は實に余に取つては情けなくも落膽の感を深くしたことであつた。

だから夕方七時に約束通りトレフツを待たんが爲めセントポール寺院の前に立つた。時に自分は勇氣が全く沮喪して殆んど倒れんばかりに疲憊して居たのに何等の不思議もなかつたのである。九時まで自分は待つて居たが、トレフツらしいものは一人も見えなかつた。

そこでトレフツは既に適當な汽船に甘く乗り込んで、或は早や倫敦を後にしたのだらうと確信した。時に余は意氣銷沈してハイド、パーク公園に身を投込む様にして行つた。所が悲しい哉、公園は昔日の慣例に反して全く鎖されてあつた。さて

これでは自分はどうしたらよからうか、今後は何處に睡眠したらよからうか。街上に愚圖くして居ては人目を惹く許りである。余は勿論許可券を所持しないから、自分は宿屋に行く事も出来なかつた。許可券と言へば、之は英國では只今は英國人自身も皆所持して居なければならぬもので、之がなくては宿主は人を宿泊させることができない。若し内密に宿泊した場合には重罪に處せられるのであつた。

余は酒で元氣をつける爲め、貧相な酒店に入つたが、僅かに暖たかい酒一杯とビスケットを一片貰つたばかりであつた。その他はすべて食ひ盡されて居た。兎角する中に酒場も閉場したので、自分は再び街上の人となつた。余は上流社會の人の生活して居る街路に曲り込んだが、此處には一見宮殿かとも思はるゝ堂々たる邸宅が立派に手入れをした前庭に取り巻かれて居た。自分は最早や眞直に立つては居られなくなつた、其場處の空氣は清潔であつたので、余は即刻決心して前庭の垣を飛び越えて、密生せる黃楊樹の籬の中に匂ひ込んだ、此處は人道から僅かに一步を隔つ

るのみであつた。其時の余の氣持は逆も筆紙に盡すことができない。心臓の脈搏は烈しく、頭の中には千々の思ひが去來して居た。このとき護謨引きの外套にくるまつて丸で盜賊か何かの様に身を竦めて潜伏所に踞んで居た。

若し余の知人が今此の如き状態に在る余を見て眞逆に獨逸の將校とは受取らぬであつたらう。余は丸で犯罪人の様な氣がして居た。そして余は此慘ましき状態は何人にも話すまいと堅く自ら決心したのであつた。若しあの晩——二日後に余が終夜放浪し歩いて然もこれを全く當然だと思つたあの晩の事を豫知して居たなら、余は此晩今少し希望を抱いて居たであつたらう。今晚はまだく宜い方であつた。

自分が約一時間此潜伏所に居た頃、此邸宅の立派な外廊の大折戸が開いて、美しく夕化粧を施した多數の紳士淑女等が市中の夕景色を楽しまん爲めに出て來た。余の潜伏して居る所からは、すべてがよく見えて居たし、又彼等の一語一句も明瞭に聞えた。暫らくすると、室内でグランドピアノの奏樂が始まり、間もなく立派なソ

プラノトが響き渡り、世にも珍らしく美しい憧憬の情深きシューベルトの歌が余の魂魄を奪つて了つた。

遂に余は心身共に疲勞の餘り、恰も死人の様に熟睡した、が夢の中には最も美しい未來の光景が浮んで居た。

自分と僅か一步を隔てたる街路の上を行きつ戻りつする巡査の同様な歩調と鮮やかに輝やける太陽とが翌朝自分を目醒ました。矢張り自分は今迄眠つて居たのだが、之からは用心く！知覺の魯鈍なもの、様に此巡査は行きつ戻りつして、中々去り相もなかつた。漸く余の幸運が廻つて來た。可愛可憐の小間使が戸を開けると巡査が急ぎ其側に行つて、露の滴るゝかと思ふばかりの乙女と仲好く巫山戯て居た。

余は兩人に見届けられずに、一躍して垣を越え街路に出た。この時正に午前七時で、丁度ハイド、パーク公園が開かれたのであつた。まだ地下鐵道は運轉して居なかつたので、余は公園に入り込んで、既に氣樂さうにやつて居た他の多くの放浪者

共と一緒にベンチに腰を掛けた。そして帽子を目深に引き冠つて九時まで寢續けたのである。

夫れから余は新たに元氣を回復して地下鐵道に乗り、汽船の碇泊場に行つた。「ストランド」で余の視線は端なくも大きな黄色の貼札に引きつけられた。

其札に肉太に印刷してあつた文句を一讀すると、余は一方ならず驚愕した。其喫驚の有様は名状すべからざるものがあつた。貼札の文句は左の通り。

一、トレフツ君は既に前夜逮捕せられたり。

二、ブリツシヨウ君は今尙ほ縛に就かず。

三、併し彼は既に跡をつけられつゝあり。

一と三とは余には新事實であつたが、第二は余の已に知れる所であつた。

そこで余は急ぎ「デリー、メール」紙を買ひ、或る朝食屋に入り込み、大なる興味を以て下記の逮捕狀を讀んだのである。

脱走獨逸人の搜索。手掛は高調子の聲音。

昨夜スコットランド、ヤードは月曜日レイセスターシャー州ドニングトン、ホールを脱走せる獨逸捕虜の一人なるグンテル、ブリツシヨウに關し左の如き訂正文を發表したり。

身長五呎五吋半、體重百三十五封度、顔色清美、頭髮黃金色、眼眸碧色、文身記

號は左腕に支那龍あり。

既に「デーリー、クロニクル」紙に記載したる如くブリツシヨウの同僚たるトレフツは月曜日夕方ミルウォール、ドックスに於て再び逮捕せられたり、兩人はいづれも海軍將校なり。以前の記述に依ればブリツシヨウは二十九才なり。彼の聲音は高調子なり。

彼は取り分け派手やかにして氣の利きたる容貌をなし、齒並甚だよく、談笑の際

EXTRA LATE WAR EDITION

HUNT FOR ESCAPED GERMAN.

HIGH-PITCHED VOICE AS A CLUE

Scotland Yard last night issued the following amended description of Gunther Pluschow, one of the two German prisoners who escaped from Donington Hall, Leicestershire, on Monday:-

Height, 5ft. 5 1/2 in.; weight, 135 lb.; complexion, fair; hair, blonde; eyes, blue; and tattoo marks, Chinese dragon on left arm.

As already stated in "The Daily Chronicle," Pluschow's companion, Treppitz, was recaptured on Monday evening at Millwall Docks. Both men are naval officers. An earlier description stated that Pluschow is 29 years old. His voice is high-pitched.

He is particularly smart and dapper in appearance, has very good teeth, which he shows somewhat prominently when talking or smiling; is "very English in manner," and knows this country well. He also knows Japan well. He is quick and alert, both mentally and physically, and speaks French and English fluently and accurately. He was dressed in a grey lounge suit or grey and yellow mixture suit.

London Prisoner Recaptured.

August Arndt, who escaped from internment at the Alexandra Palace, North London, on Sunday, has been recaptured.

Der erste Stechbrief

狀捕逮の回一第

稍や顯著に之を現はす「態度は極めて英國式」にして此國をよく知れり。彼は又日本をもよく知れり。彼は精神的にも肉體的にも迅速且機敏にして、英佛語を流暢に又正確に語る。彼の服装は鼠色の背廣服又は鼠と黄との混合色の服装なり。

ア、可哀相にトレフツは到頭やられて了つた。そこで余は是より如何なる方法に出づるかといふ余の決意は既に出来て居た、そして右の逮捕状は此點から見ても余を助くる所が却て多大であつた。余は早速此鼠色の護謨の外套を脱ぎ棄てなければならぬ。余は「ブラックフライア、停車場」に行つて、外套をその手荷物一時預所に渡した。自分が此鼠色の代物を係りの者に交附すると、此男が突然余に尋ねた「貴方の御姓名は？」

此尋問を受けると余の身體は戦慄した、實は自分はこんな問に接しやうとは全く思設けて居なかつたのである。余は膝を震はしながら「私マイキの？」と尋ねた、素より心の中では此男は余の何人たるかを知つて居るものと思ひ、驚愕のあまり實は獨逸

語で答へたのであつた。

「あゝそうですか、マインさんですね、マ、イ、ン、ですね」そう言つて彼はマイン殿と記した紙片を余に渡した。

余の驚愕が此事務員の注意を惹かなかつたのは實に不思議であつた、そして自分が停車場の入口に張番して居る二人の巡査（彼等は自分を鋭どく檢視した）の中を通り抜けた時に自分は餘り良い氣持がしなかつた。

余の逃走に際しては藍色の通常服を着用した、此服は以前余が上海で作つたもので既に上海ではブラウン君やスコット氏が用ひ、後には百萬長者のマックガルビンが着て、その次には或る錠前屋後の城主エルンスト、ゾーゼが相續し、更に次には獨逸の一海軍將校が着用するに及んで幸福な日を過し、今や遂に造船所労働者ジョーヂマインの身體にかゝつて其一生を終つたのである。上衣には藍色の水兵用肉襦袢を着て居たが、之は捕虜となつた水兵傳令の或る男が自分に呉れたものである。ボツ

ケツトの中には古い蟲の喰つた烏打帽と小刀と懐中鏡と剃鬚機と一本の紐と「ハンケチ代用の布片二枚とがあつた。其他には余が節約して残した百二十^{シリンク}志の大財産を所有して居た。目下英國では英國人すらも所持しなければならぬ色々な旅券や書附類は自分は嘗て手に入れて居なかつた。

そこで余はテームズ河畔の人通りのない所に行つた。立派な廣縁帽は偶然ロンドンブリッヂから河中に飛んで了ひ、カラーやネクタイも亦其跡を追ふて別の場所に飛んで行つた。綺麗な鍍金の釦は鮮やかに緑色の分捕シャツ（符徴はクノッフ、ツヴァング）の中に輝やいて居た、それから頭髮はワセリン、靴墨、及石炭粉を交ぜたもので黒く且汚なく塗りつけ、両手は間もなく嘗て水に觸れた事はないもの、様に見えた。余の身は最後に積んである石炭の上を力一杯跳ね廻つたのである、すると茲にストライキをやつて居る造船所労働者ジー、マインといふものが美事に出来上つた。

そこで事實何人と雖も自分を見て獨逸の海軍將校と想像するものはなかつた、猶更に「派手やか」とか「氣の利きたる」とかいふ點は微塵もなかつたのである。余は自分の役は甘く演じたと信じて居る。余が先づ余の周圍に對する憎惡や種々の汚辱に對する厭惡の情を制取し、身自ら安全に感じ始めてからは、實際自分が扮したと思つたもの以外に見え様はなかつたのである。即ち怠惰な穢るしい造船職工か、然らすんば帆船の水夫としか見えなかつたのだ。

我帽子は生意氣に阿彌陀様に冠られ、塵埃に塗れ、上衣の釦は開けた儘で、藍色の褌袴を現はし、衣服の飾としてはカラーの釦が一つあるばかり、それで兩手をポケットに入れ、口笛を吹き唾を吐きながら、到る處で世界を股にかけて航海する不定期船の水夫等の如くづばらに振舞ひ、無作法に歩き廻つて、終日倫敦の市中を流浪したのであつた。然も其間自分が眞物のマドラスよりは稍や違つたものだといふ疑念は秋毫も何人からも認められなかつた。

余の踪跡を晦ました原因は主として此點に存じて居たのである。だから余の身は少しも發見せられずに居た。又余は此方法を用ひさへすれば自分の正體を包むに唯一の妙手段と確信し、其筋より些の嫌疑を蒙らない様に注意し成るべく卑賤なる海員らしき外觀を保つことに努めた。此風采では何人も決して自分の上に特別の注意を拂ふなどいふ段取になつては居らなかつた。萬一巡查が余の職業身分等を尋ねたときには余は臆面なく本名を自白するに差支ない位であつた。だから英國官憲が余の一身を搜索する逮捕狀に腕の文身のみを常に手懸として舉げて居たのは全然迂濶の次第であつた。逮捕の方針が假りに此の如く進んだとすれば余の前途は既に業に良好の運命に歸したのであつた。

かくて倫敦到着後二日目の午前余の爲め前代未聞の幸運が向いて來た。自分が乗合自動車の階上に著席して居ると、余の後方に二人連の商人が何事か盛んに談じて居た。するに偶自分の耳に「和蘭の汽船チルペリー號が出帆する」

といふ言葉が聞えた。そこで自分は鋭どく其人達の談話に聴耳を時だてた。

余は飛立つ如き心をちつと抑へて一言をも洩さず聞取らんと態と沈著の風を装ふた。それでないと余が歡喜の餘り跳躍するかも知れぬと思はれた。右の不注意な紳士は毎朝七時に和蘭の急行汽船がフリッシンゲンに向け航行し、毎日午後はその汽船はチルベリー船渠の沖に投錨するのだと云つた。

余は此空谷の跫音に接したので突如自分は乗合自動車から下つた。

余は直に「ブラックフライアース停車場」に急行して切符を購ひ、一時間もすると自分は既にチルベリーで下車した。その時は丁度晝食の頃で、労働者等は推し合ひ蹈み合ひ街衢に充滿して居た。余は先づチームズ河に下つて行つて、四邊の形況を一覽したが、余の求むる汽船はまだ到着して居ないのを知つた。而かも其到着迄にまだ時間はあるし、余は馬鹿に空腹を覺えたのであるから、更にチルベリーに戻つて殊更造船職工等の出入頻繁な飲食店に入り込んだ。大きな食堂の中に大約一百

人の労働者が長い食卓に着席して恐ろしく大きな皿を平らげて居るのを認めた。自分も是等の人々のする様に亦食卓の側に行つて、食卓の上に八片^{ペンコ}を置き、馬鈴薯と野菜と大きな肉片とを盛つてある大きな皿を貰つた。それから次に酒場に行つて一杯の強酒を買ひ、落ち着き拂つて他の労働者と共に一方の食卓に着いた。そして彼等の食べ方及其奇怪な身振を模倣して喫べて見たが、豌豆をナイフで食べるのに余は頗る困難を感じた。

余は恰も珍珠を澤山に詰め込んで居る際突然後ろから余の肩を徐に打つ人があつた。余は大に驚き俄に五體が氷に觸れた様に感じた。振り返つて見ると此處の主人が傍に立つて居て余に書附けを求めた。此とき余は斯う考へた。彼は無論例の證明書の事を言ふのだらう。此の如くなつては萬事失敗だと覺悟した。自分は言ふ迄もなく何物をも示す事は出来なかつたので、主人の言ふが儘に彼の後に隨て行つた、そして彼が電話をかける爲め電話機の所に行つたのを見て自分は非常に驚愕したの

PLUSCHOW STILL FREE.

THE CHINESE DRAGON CLUE.

Gunther Pluschow, the German naval lieutenant, fugitive from Donington Hall, has now been at large seven days. The Chinese dragon tattooed on his left arm while on service in the East should, however, betray his identity.

Further particulars of the escape with Lieutenant Treppitz, who was caught at Millwall Docks within twenty-four hours, show that last Sunday evening a violent thunderstorm raged over Donington Hall when the evening roll-call was taken. Instead of assembling with the other prisoners within the inner of the two rings of wire entanglement, the two hid within the outer circle. Their names were answered by other prisoners. A wooden plank near the outer ring showed how they got across the barbed wire.

余の逃走後一週間の捕縛状

である。余は此時既に戸口の方に一瞥を與へて丁度走り去らんと決心した刹那、余を硝子窓から見守つて居た主人は再び余の所へ歩んで来て斯う言つた「貴方は書付を忘れたのだから、私は貴方に何も差上げる譯に行きません、兎に角お名前は何と言ふのです、そして何處から來たのです」

「僕はジョウジ、マインと言つて、今河の中に浮んで居る四本マストの「オハイオ」號に乗つてゐる亞米利加の船夫です。僕は丁度少し前に此處へ這入つて来て、もう食物と麥酒との代は拂つたのです、無論書附は持つて居ません！」

主人「此處は社會民主黨の組合で公開はしない、此處へは唯黨員だけが來るのです、分つたかね、併し貴方が黨員になられるなら何時來ても構ひません」

無論自分はそれを承諾した。三志ツルシの入會金を拂ひ込んで、鮮紅色の絹紐を卸の穴に結びつけて貰ひ、又一枚の會員證を受取つた、之で自分はチルベリーの社會民主黨の造船職工中最年少の黨員となつたのである。

巧みに逃亡せる脱走者

青島よりブリッショアの飛行機逃亡

當局者は今尙ほ支那龍の手掛りに依りて、月曜日ドニングトン、ホールを脱走したる獨逸海軍中尉ゲンテル、ブリッショアを逮捕せんことを期す。龍は支那風の模様を以て左腕に文身を施しあり。是れ恐らく支那人の細工せるものならん、何となればブリッショアは年齢僅かに二十有九才たるに過ぎずと雖も、既にカイセルの海軍にありて冒險的閱歷を有したればなり。

彼は日英兩國が協同して青島を攻撃したる際其要塞内にありたり。同處の陥落する間に彼は飛行機に搭乗して逃亡したり、而して數週後日本の商船に乗込み居たるをジブラルタルにて發見せられたる也。

彼は多分、英國の港灣より出帆する中立船に水夫として乗り込まんとするなるべし、此見解の下に日下國中のあらゆる港灣に於ては極めて嚴重なる警戒を加へつゝあり。ブリッショアは代表的の獨逸海軍將校にして、身長約五呎六吋、金髪を有し顔色は清新也彼の英語は不正確にして、和蘭人と見做さるべし。併し何等の方法を取るとするも、彼は左腕の支那龍を取り去ること能はず、而して彼の再捕は唯時間の問題たるべし。

それから余は再び食卓に戻り、恰も何事も起らなかつたかの様に一二種のお菓子を喰べ、唯今の驚愕を忘れる爲に酒を一息に飲んだ、併しこのとき食欲は既に去つて居り、最早其食物もさまで味がなかつたので、余は間もなく此食堂を去つた。

それから余は河岸に下つて行つて、草原の中に横臥し、寝て居る様な風をして、山猫の様に四邊の光景に注意して居た。

すると汽船は幾度も相踵で余の側を通過した。余の希望は無限に加はつて來た。午後四時に和蘭の急行汽船が宏大に且壯嚴の船體を現はし威容堂々として進行して來て、余の鼻の尖の浮標に繫泊した。余は顔を上げて見ると、船首に白色の鮮かな字體で汽船の名が「メクレンブルク」と記された。それを讀んだ時余の喜悅と幸福とは實に意外だ！。嗚呼メクレンブルクの産でシブエーリン人たる余に取つて是は亦絶好の吉瑞であつた。

そこで余は渡船でグレーヴスエントの方へ渡つて了たが、此處からは人の注意を

惹かないで船を見る事が出来た。そして両手をポケットに差入れた儘、無造作に小歌を口笛で吹き謡ひながら出来るだけ放縦の風を装ひ跛行しつゝ、河岸の通路を愚圖愚圖と彷徨した。併し余は内實活眼を開いて観察して居たのであつた。

このとき余の計畫せる目論見は左の如くであつた。

余は夜中に汽船の繫留せる浮標に泳ぎ著き、それより錨索を傳はつて船内に攀ち上り甲板に忍び込み、和蘭に密航しやうといふのであつた。

余は活動力の根源を間もなく發見したが。其際幸に何人にも睨まれて居ないので知つたから一先づ我身を隠匿しやうと企だてた。而して早速自分は材木と船具類の置場の隅に潜り込んだが、木材はチームズの水面まで達して居り、幾枚かの板の下には枯草の束が收藏されてあつて、余の爲め屈竟の潜伏所を形成した。余は呼吸を忍んで夜になるのを待つて居た。

其日の夜半十二時頃に余は其潜伏所から匂ひ出した。晝間には附近の物體及自分

に必要な凡ゆる地勢は言ふも更なり其方向迄精密に心中に銘記して置いた。そこで余は足音靜に廢物や古材木の堆積してある上を忍び越えた、折しも雨はざあ／＼と降り頻つて、夜暗く鼻面を壓するやうで、晝間に材木置場の傍で認めて置いた二隻の小船を殆んど捜し當てなかつた程であつた。

それから余は四つ這になつて絶えず四方の物音に氣を附け、見え難い闇の中を手探り、視力を努めて豫定の目的地に近づいて行つた。本日の午後には猶水上に泛んで居つた彼の二隻の船が今は全く陸上に乾上つて居るのを見た。されど近づいて見ると、其船尾に小傳馬船が横はり其船底が水に洗はれてゐた。

余は矢庭に決心して其船に飛乗らうとした、所が如何した機會であつたか、自分にも能く分らぬ中に脚下の土地が崩れて、其瞬間に自分は腰まで粘つた惡臭紛々たる泥濘の中に落込んで了つた。そこで腕で周圍をこづき廻はして、漸く左手で岸から右の船に渡してある道板を捉まへることが出来た。

此處で一生懸命に極度の努力をして、漸く自分は危く土左衛門とならんとした墓穴から辛ふじて這ひ上つた。けれども全身は綿の様に疲れて、到底氣力の續く筈がないのを知つたから、痛む足を曳きすりながら亦元の枯草の陰へ戻つて來た。

倫敦到着後、第三日の朝に太陽が麗らかに輝て登つた時、自分は再び柵を飛び越えて、グレイヴスエンド公園内のベンチの邊を無様に歩いて居た。此朝正七時に和蘭汽船「メクレンブルク」號は浮標を離れて、大海に向けざわ／＼と音を立てながら河流を下つて行つた。

此日は終日附近の各處を徜徉し猶其後も毎日倫敦市内を放浪した余は毎日幾時間も他の懶惰な人足等と同様に、橋の上に立ち盡して、中立汽船の位置や其積荷の場所などを事細かに注意し、何時でも幸運の向いた時に、他人に悟られないやうに船内に忍び込まんと待ち構へて居た。

此日頃食事は必ず倫敦東區イーストの最も下等な労働者賄所で取つた。自分は如何にも香

落の極度に沈み厭んだ様な風を装ひつゝ、甚だ穢ひやくるしき服を身に着け、時には千鳥足で歩いたり、時には態々跛行したりして、顔色は憔悴として額骨が立ち、脚は曲つて危なげに見えたので、誰れ一人として余に對して深き注意を拂ふものはなかつた。余は何人とも言葉を交ふるのを避けた、そして労働者等が其食事を注文する時の言語動作を充分に注意して見た。自分等は聽て此道にかけては極めて確實になり、立派に卒業して了つて、俘虜の逃亡者として何時か發見せらるゝかも知れぬといふ考は其後全く浮ばぬ程に横着になつて來た。

其日の夕方余は再びグレイヴスエンドに來た。

河上を眺めると事實再び汽船が繫泊して居て、今度は「プリンツエス、ユリアナ」と云ふ和蘭船であつた。

そこで今回は萬事に一層の注意を加へ、殊に河岸の土質を充分に調査して、自分ながら船内に忍び込む仕事に聊か不安を抱かぬ迄になつた。

夜半十二時に余は豫定の場所に行つた。河岸には石塊が累々として、丁度退潮が始まつたばかりであつた。余は静かに靴と靴下と上衣とを脱いで、靴下、時計、剃鬚道具其他の所持品を烏打帽の中に入れ、其物品諸共此帽子を頭に載せて、緊と縛り附けた。

それから上衣と靴とを或る石の下に匿し、ヅボンの革帯ギンを固く引き締めて、緩やかに水の中に這ひ込んで汽船の方向に泳ぎ始めた。

此晩も亦雨天で暗かつた。間もなく余はたつた今出たばかりの岸さへも認め得なくなつた。其時余は漸く前方に碇泊して居る漕艇の輪廓を微かに見出すことが出来た。余は勇氣を鼓してそれを目掛けて大に努力した、然るに如何に渾身の力を出しても毫も其船に接近することができなかつた。水を充分に吸つて居る余の衣服は厭が上にも重くなつて自分の身體は之が爲めに水中に沈められやうとするのであつた。余の體力は漸次に衰へ始めた、實は碇泊して居た小艇は既に幾隻も淡き影を浮べて

余の傍を通過するを見た。嗚呼余は強き流れに遮ぎられて其側を引き離されて居た。余の神経は痙攣的に一張一弛しながら、全力を傾倒して漸く其船の舷側に辿り着き頭だけを水上に浮べて時機を伺つて居た。

併し余は間もなく意識を失なつて了つた、そして再び我身に返つた時余の體は海草の茂れる滑らかな石の上に漂着して横はつて居た。

されど余は運よく河岸の餘り石のない所に達し、河が急に彎曲して居る所に打ち上げられたのである、そして退潮の際急速に水嵩が減じて行く爲め乾陸に上げられたのであつた。

折節寒氣は激げしく風は吹き募り余は無理な努力の爲め身體が震へ戦きながら漸く元氣を恢復して、岸に沿ひ足許ひよろ／＼と進み、遠近を尋ねて、一時間の後やつと上衣と靴とを見出した。それから余は板扉の柵を乗り越え、がた／＼震へて齒を鳴らしながら積藁の上に横はつた。生憎雨は車軸を流す様に降つて居た、そして氷

の如き川風は余の濡鼠になつた身體を遠慮容赦もなく吹き掃つて居た。此邊に掩蔽物と言つては唯びしよ濡れになつた上衣が一着あるだけであつた。そこで余は少くとも腹の中だけは調子の狂はぬ様にして置き、今後の活動を續行せんと思つて勢力の挽回を圖つたのである。夫故に余は兩手を廣げて腸胃を保護する様に腹の上に載せて、殆んど一睡もしないで二時間を過したが、此上逆も寒氣を辛抱することが出来なくなつて、潜伏所を脱出し、些かなりとも暖氣を取らうと思つて、其近傍の道路を駆け歩いた。

此とき余の濡らした衣服は長時日の間乾かす余が獨逸國に歸つた後數日と云ふもの暖爐の上に吊して漸く乾いたのである。

是より後余は又例の如く終日倫敦の市中を彷徨した。余は多くの教會を訪ね、如何にも眞正の祈禱者らしき恭敬の素振を呈して居たが、此間に於て僅に一時間許の睡眠を貪り得たのである。

此日余は殆んど英國兵士になり濟しかつた事がある。其理由を述べると、當時倫敦では毎日の様に街路の廣辻などに演說會場が假設され、辯士が民衆に向つて熱心に演說をして居た。是は言ふ迄もなく新兵募集の遊說である。

辯士は音吐朗々燃ゆるが如き意氣込で、言葉巧みに、無上の歡喜を湛へて居る。

彼は今耳を敬つて、傾聽せる群衆に對して「假りに先づ獨兵が倫敦の内に其勝利の進軍をしたとするならば、諸君は如何に狼狽の狀を呈するであらうか」などと述べ立てた。又彼は斯う言つた「さうなると倫敦の町々には野蠻人の足跡を印するのでありませう。諸君の細君其他の家族は獨兵の爲め嘲罵されたり或は凌辱せられ、其穢らはしき靴を以て足蹴にされる事でありませう。諸君は、諸君の一身上に自由の權利を貴べるブリットン人は此の如きことを欲するのでありませうか」

そのとき聽衆中二三の人が怒つて「否」と返事をした。

「では宜しい、お出でなさい、そして……………今軍隊に加はりなさい！」

辯士は少しも慌てず斯う述べた。余は多分一同が雪崩を打つて彼の許に馳せ参するだらうと思つて居た。實に此男は流暢の快辯を振つて人を惹きつける様な巧妙な演説をしたのであつた。然るに一人も其言に動かさるゝものはなかつた。誰れ一人キチナー元帥が正に其適任者を求むるに骨折つて居るのだと信するものはなかつた。そこで該辯士は新に最初からやり直したが、彼の爛々として火の如き熱舌を謹聽する人もなく聴衆は次第に消えて失せて影を匿した。

其間に新兵徵募係の下士官が群衆環列の中を見て歩いて、志願者もがたと尋ねたが、多くの人は頭を横に振るばかりで、快諾を與へるものは一人もない。千言萬語を吐て只管兵役を勸説する彼は突然自分の前に立塞がつた。

棒の様に丈高い一軍曹が余の前に來つて、余の上膊部に觸つて檢べて見た。彼は余の體格を凝視して非常に満足した様であつた、そこで彼はあらゆる手段方法を盡して、特にキチナー元帥の指揮下に在る陸軍兵は全世界に於ける最も美しくしいもので

あると言つて余を説伏し始めた。されど余は其好意を辭退して了つた。

余「否、いけません、僕は漸く十七才です」

下士「なに、それは構はない、唯十八才にしさへすれば可い、それで少しも不都合はないのです」

「否實際いけません、僕はそれに亞米利加人ではあるし、船長から許可も貰つて居ない」

すると厄介な男は極めて鮮明な彩色で英國陸軍兵の服裝を寫してある書帖を取り出して余に示した。此奴容易に身動を爲ささうもなかつた。兎に角此男の毒手から免れやうと思つて余は斯う言つた「その帳面を一冊自分に渡して下さると可い、そうすれば私は夕方我船長と相談し、翌朝どの軍服が自分の氣に入るか貴君に報告しませう」

爾後余は此場所を態と迂回して歩行するを常としたのは特に言ふ迄もない。

かくする内余の下等労働者たる價値は次第に確實になつて來た。余は汚ない服裝をしながら英國博物館にも行つて、大きな繪畫陳列室を一つ一つ見て歩いた、否余は午後に開演せる寄席をも見物したが、此の如き場所で一度も何處からとか何處へとか訊問されたことはなかつた。寄席では甚だ可愛らしい金髮碧眼の若い娘（帽子外套預り所）が特に余に好意を示した。中には明らかに此立派な寄席に迷ひ込んだと見て取り此哀れな「水夫」に對し同情するものもあつた。

余の最も滑稽に感じたのは、余が乗合自動車の階上に着席すると、婦人や少女等が鼻孔を上に向けて怒りながら、余の傍から跳ね退き、屢々侮蔑の眼を余に投じたことであつた。若し彼等が余の素性を詳にしたならどうであらう、然し余は常に床しい芳香を所持して居らなかつたのみならず、毎日毎夜乞兒同様の生活をなし、又濡れた泥だらけの衣服を着けたりして、悪臭紛々自分ながら呆返つたから、嘸婦人達に忌嫌はるゝのも何の不思議もない。

夕方になつて余は再びグレートヴスエンドに歸つて來た。眞直にチームズの河岸まで廣がつてゐる小公園では軍樂隊の演奏が行はれて居る。余は數時間河岸の腰掛に腰を掛けて音樂の諧調に耳を傾け恰も山猫の様に眼玉を動かして居た。

例の汽船まで泳ぎ着くといふ余の計畫は全然拋棄した、實は其距離が餘りに遠く、流れが餘りに烈しいからである。

そこで今度余の問題は、何處かで人に知られない様に小艇を徵發して、之に乗込んで彼の汽船に到着しやうと思つたのであつた。

余の前には丁度恰好の小舟があつた、が、其舟は浮標に繫留してあつて、歩哨が日夜警戒して居た。

然も一か撥かやつて見たくなつた！

此夜の十二時に、今回も亦眞暗黒の折に余は公園の中を忍び出で高さ約二メートルの岸壁に匂ひ上つた。一躍して庭の垣を一つ跨ぐと、見よ足の下に緩く揺れなが

ら其端艇が浮んで居た。余は呼吸を殺し且つ耳を澄ました。余を距ること僅かに十歩を距て、歩哨は睡魔に襲はれながら僅に彼方此方と徘徊して居た。余は靴を脱いで、靴紐で頸に縛りつけ、口元には開けた小刀を銜へた。余は亞米利加印度人の様に静かに岸壁を滑り降りた。丁度足の尖て其端艇の舷上を捉へ、音を立てずに兩手を堅固な花崗石に沿ふて滑らしたが、一秒時もすると、既に自分は匍ひ屈んで艇に乗り込み、四邊の様子を窺ひつゝ、呼吸を殺し、氣を張つて居た。すると歩哨殿は明晃々たる孤光燈の下にあつて相も變らず行きつ戻りつして居た。余は仕合に闇の中に小舟へ乗込んだ。余は素より水雷艇の乗員として夜航で眼力の訓練をしてゐたから、暗夜に拘らず能く物體を認められ、注意に注意をして撓を手探り取つた。畜生、撓は鎖で縛り込んであつた。所が幸にもそれは強く引き張つてはなかつた、そこで余は軽く先づ釣竿を取り次に撓を鎖索から引き離した。それから小刀で岸壁に繋いであつた二本の綱を切断した上で、人に聞かれぬやうに撓を水中に入れ其ボ

トを漕ぎ出した。

自分がボートに乗つた時艇内に多量の水が這入つて居たが、余が乗込むと同時に其汚水は急速に増加して、早や余の座つて居た坐板を洗つた。其結果ボートは益々重く取り扱ひ難くなつて、余は絶望の極度に陥り、我畢生の力を出して撓に取り纏つた。すると突然龍骨が歪んで船は大磐石の様に河底に膠座して了つた。撓と釣竿とを持つて舟を推出さうとしても更に其効がない。ボートは泰然として微動だもしなくなつた。そして艇の周囲では水がざわ／＼音を立て、俄かに退き去り、數分の後には我艇は全く乾き切つた泥土の中に坐つて居たのだが、其代り面白い事には艇内は縁まで水が湛へて居た。潮の満干に當り水嵩が斯くも急速の變化を見るのは余の是迄嘗て経験した事がない。要するにチームズ河は潮汐の急變で評判が高いのだが、然も此の如く急激の變化があらうとは毫も思はなかつた。

此とき余は實に今回の逃亡中最大危機に罹つたのである。舟の周囲は柔軟な惡臭

紛々たる泥土で包まれ、然も之は余が二晩前に生死の苦みをしたものであつた。それを思つたゞけでも余は既に全身に戦慄を覺えたのである。何故と云ふに、僅々二百メートルの彼方には歩哨が警戒して居る側で、余は高さ二メートルの花崗石の岸壁から約五メートルばかり距だつた所に艇上に坐してゐたのである。

余は冷靜に考へながら坐板の上に手を拱て居た。時に余の頭腦に突如湧き來つた或る一種の恐慌が生じた、余は此處で英國人に見咎められてはならないと思ひ煩つた。若し余の罪狀が發覺したら、英國官憲は余を狂犬の様に撲殺するであらう。

翌日午前までは艇外の水は更に増すことはなかつた。それ故に余の探るべき方法は唯一つであつた。乃ち今あらゆる體力を集中し、齒を喰ひ縛つて此泥土を脱するより外に良策がなかつた。余は又靴下を脱ぎ去り、出来るだけ高くツポンを捲り上げ、艇板と橈とを柔かな泥土の上に並べて置き、それから鈎竿を跳竿に代用し其尖端を板の上につけ、自分はボートの舷に立ち渾身の力を振り出して、一大跳躍を加

へ竿高飛をなして鈎竿を中心に跳んだ、するとごつと大きな音がして自分は岸壁から僅かに一メートルを離れた所に達して、膝の處までも軟泥の中に陥り込んだが足は固い土地に觸れた。そこで余は岸壁に近づき鈎竿を杖として河岸に飛上り數秒の後に自分は堤上に登つて、數時間前に音樂を聞いて居た小公園の芝生の中に座つて居たのである。其とき余の周圍は音もなく幽靜であつた。されど余の胸からは壓の感じが全く脱れて了つた。かくて何人も余の動作に注意せず。かの歩哨すらも毫も知る所はなかつた。

余は我足を見ると可なり不快を感じた。股の邊もすべて厚い惡臭ある鼠色の泥層が粘り着いて居た。而して洗濯の水は此近所には一滴もなかつた。然し此泥では逆も靴下や靴が穿けるものではなかつた。夫故に余は苦痛に堪へず自ら指で出来るだけ泥土を擦り落した、時間を過ぎて皮膚に粘着して居る泥土が幾分乾燥して來ると、余は漸く靴や靴下を着け、巻き上げたツポンを撫で下す事が出來たのであつた。

余は前述の如く第一回の計畫は如何にも失敗に終りはしたが、然も其中大分好結果の所もあつたので、自分は勇を鼓して更に第二回の實驗を試みやうと思つた。

余は両手をポケットに入れ、酩酊せる水夫らしく装ひながら、歩哨の警護して居る小さな橋の方へ酔歩蹣跚として進んで行つた、そして泥酔のあまり余は軽く歩哨を肘で推したが、彼はこんな暴行に接するのは普通の事である様に見えた。

「オイ、君、ウイスキーが一杯過ぎたな！」と彼は氣持ちよく斯う言つて余の肩を軽く打つて其儘通過を許した。

余は歩哨の位置より數百歩を去ると再び元の余に返つた。少し探索すると余が前夜水泳を企て、失敗した彼の石多き岸邊を瞥見した。

時刻は夜中の二時頃であつた、余は直ちに衣服を脱ぎ棄て、今回は身輕に且妨害物もなく神が造つて呉れた儘の丸裸體で水の中に跳び込んだ。空は全く曇つて居た。そして約二百メートルほど岸から離れて投錨して居る多くの舟艇の輪廓が朧ろ

に見ゆる迄泳いだ。我身の過ぐる處水色は常に見られぬ程に燐光を放つて輝いた、其光景は恰も熱帯の海上で見るやうである。余の身は宛かも金と銀との海を泳いで居るかの感がした。外の時であつたら此自然の美趣は余を無上に喜ばしたのであらうが、今は余の赤裸の白い肉體が鮮明な黄金の波に照り榮えて却て自分の秘計を曝露しはしないかと一方ならず心配したのであつた。但し此三回目計畫は最初はすべて希望通りに行つた。が、左の方にある防波堤の角を通過するや否や河流は再び余を捕へ、茲に再び水勢と體力との格闘が始まつた。余は生死の境を超脱しかけた頃、漸く第一のボートに達した。そこで最後の力を振り起して、強く攀ち上つて其ボートの中に滑り入ると余は喫驚した。其ボートの中は空であつた。撓一本も釣竿一本もないから余は前進する方法を認めなかつたのである。余は已むなく少し休息して後再び水に跳り込み、今度は流れに随つて其後方にあるボートの方へ泳いで行つた所が此ボートにも何もなかつた。斯くして其次の三つのボートも同様に通過し

て余は遂に最後の之れも空のボートに到着した。そこで少し呼吸づいてから、自分は重ねてピカ／＼光れる、併し今は不快な程冷やかな水の中に滑り込んだ。而して二時間苦しみ泳いだ揚句、再び自分の衣服の所に着いた。

余は寒さの餘り丸で枯葉の様になる／＼震へてゐたので、濡れた身體に濡れて粘りつく着物を着けるのに随分困難を感じた。

それから三十分許を経て、余は自分の運勢を疑ひながら例の積藁の上に横たはつた。

自分が稍勇氣を沮喪したといつて、就中冒險の作業に無關心になつたと言つて、讀者諸君は余の行爲を惡意に解釋し玉ふな。然り、自分は翌朝早く潜伏所を出發するの元氣がなかつた程意氣が銷沈して居た。實に此材木置場の所有者が數回余の潜伏所の傍を通過した後、余は漸く板柵を乗り越えて出たのであつた。此日余は徒歩しながらグレーヴスエンドより倫敦に至り、倫敦より亦徒歩してテムズ河の反對

岸に達してナルベリーに歸つた。但し此夜行を企てたのは自分の顔を人に見られず借用の出來るボートを見附けんが爲であつた。此企畫の結果は全然信じられない事だが、實はボートは澤山あるにはあつても其所有者がすべて充分張番をして居たのである。そこで自分は冒險の勇氣もなくなつて奔走を止めて了つた。

此夕余は最後の二十志を浪費し、それから一夜の中に乾坤一擲の快擧を企て、船渠に入り込み、中立國の汽船に潜伏せんものと堅く決意して或る寄席に這入つた。そして若し此事がトレフツ同様不首尾に終つた場合には、自分は潔く警察署に自首しやうと思つたのである。

余は倫敦の最も大きな寄席の最上部の觀覽席に立つて俳優の演藝を見て居た。其時心の聲は絶えず余に耳語いて居た「お前の活動はグレーヴスエンドにある。心の弛みが身の疲れに打ち克つのはお前の義務だ、然らざればお前は最早や獨逸の海軍々人とは言へない！」其耳語は斯うである。此寄席では活人畫として塹壕の光景や

未來の勝利及平和を讚美したものが演せられたが、勿論其場合獨逸兵は常に遁走し追撃せられて居た、更に本演劇の畫面として英國人が光彩陸離たる日の光の中に映し出だされ、頭には勝利の榮冠を戴き、右の足には鐵鎖の下に打ち倒れたる暗褐色の獨逸兵士を踏みつけて居るのを見た。其時余の胸は殆んど張り裂けんばかり神聖なる悲憤の涙に咽んで隣席に在る人の抗議をも顧みず、飛ぶが如くに此小屋を走り出で、丁度チルペリー行き終列車に乗り込んだのである。

すると再び氣持がよくなつて來た。そして余は今日こそは余の計畫は成功する、否、成功する外はないのだと心中に確信する所があつた。

余がグレイヴスエンドの取付付きの漁夫の住家を通り過ぎた時に、小さな橈を拾つたが、用心の爲にそれを携帯して行つた。港の大通りの中央でかの埠頭の切れ目に一隻の漁艇の繫泊して居る所に小さな傳馬船が揺動して居た。それから僅かに二十歩を距てた所の屋前ベンチの上には其漁艇及それに附屬せる傳馬船の持主等が心措

きなく喋舌しながら坐つて居た。所で是等の純朴な船乗等は其愛人と心嬉しく樂しんで居たので、余の居る事は少しも氣附かなかつた。

余は其虛に乗じて活躍した。それはきほどい場合であつた、併し余は心の中で斯う唸つた「世界は唯勇者にのみ屬する」そして余が最近數日來得た練習のお蔭で他人に聞こえない様に其ボートの中に匂ひ込んだ、すると微小な豆粒程の漁艇の側を徐ろに滑つて行つた、と見るとカッターの後部甲板には漁夫の細君か其子を揺つて眠らして居た。

此ボートには橈架はなかつたので、余は船尾にあつて全力を出して岸から漕ぎ出した。而して河幅の三分の一ほども進んだかと思ふと、余は突然抵抗すべからざる力を以て退潮の流れに捕へられた、そこで船は獨樂の様にグル／＼回轉をして、進路を保たんとする余の努力はすべて水泡に歸した。併し今こそ水夫の腕前を示す時だ。余は鐵の様な拳を以てボートを自由に操縦して、丁度流れに乗つて飄動しながら

ら下流に向けて舵を取つた。すると危険な障礙物が現はれて來た。开は余の進む途中に河を横斷して架せられ、兵士に依つて嚴重に警衛せられた大きな軍用船橋があつたのである。一瞬間冷靜な落ち着きがあり、此上もなく鋭い緊張状態が起つた。歩哨の呼び掛ける聲が聞えた、併し自分は一意眞直に見通し、唯橈をのみ注意して居ると、我舟は鐵砲彈丸の様に二隻の舢舨の間を通過した。それから數秒もするとボートはごつんと烈しく衝突した、見ると丈夫な石炭船の錨鎖に乗り上げて居た。余はボートの綱を錨鎖に結びつけたか、それは全く一秒時の何分の一といふ程の時間で其間にもボートは殆んど顛覆せんばかりであつた。併し其後は安全であつた。水は丸で發狂でもした様にざあ／＼と音を立て、ボートの板を掠めて流れ去つて居た思ふに今が退潮の最盛時（河流の傾斜の爲めに一層其力を増大して居た）なるのであらう。

このとき余は忍耐しつゝ、憩潮の時間を待つより外になすべき事がなかつた。

河中を眺めると右舷の方に余の求むる汽船が碇泊して居た。自分は漲潮流が起るまで待つて、それから汽船の方へ漕いで行かうと思つた。居なくてはならない汽船が急速にやつて來た時には、自分は既に心の中では酷く自惚れて喜び勇んで居たのである。兎角する中に東の空が白み初めて、刻々投錨せる船の輪廓が明快に現はれて來た。やがて太陽が上つた。然も相變らず河水はざあ／＼と流れて我舟の側を烈しく流れ過ぎて居て、前進なんか到底余の思ひも寄らぬ事であつた。所詮逃亡は今夜も亦不可能であつた。併し少くとも長い間探して居たボートだけは漸く手に入れたのを幸運と諦めて、余は最後の弱い退潮の流に沿うて下流の方へと滑つて行つた、そして約一時間後にチームズの右岸の或る墜落して居る橋に到着した。ボートは橋の下に匿し、二本の橈は用心の爲に陸上に持つて行つて草藪の中に藏つた。其後余は其附近に横臥して、充分に四邊の様子を観察した。朝の八時には余の乗らんとした汽船が昂然として軽々と音を立てながら余の側を通り過ぎた。此船は「メクレンブル

MUCH ESCAPED FUGITIVE.

PLUSCHOW'S AEROPLANE FLIGHT FROM TSING-TAO.

By the Chinese Dragon clue the authorities still hope to trace Lieutenant Gunther Pluschow, of the German Navy, who escaped from Donington Hall on Monday. The dragon is tattooed on the fugitive's left arm in Oriental colours. It was probably worked by a native artist, for although but 29 years of age, Pluschow has had an adventurous career in the Kaiser's Navy.

He was in Tsing-tao when the British and Japanese besieged that German fortress. Shortly before it fell Pluschow escaped in an aeroplane, and some weeks later he was found on board a Japanese trading ship at Gibraltar.

He will probably endeavour to sign on as a seaman in a neutral ship sailing from a British port, and, with this in view, a very careful watch is being kept at all ports throughout the country. Pluschow is a typical sailor, about 5ft. 6in. in height, with fair hair and fresh complexion. He would pass for a Dutchman with his broken English. Nothing he can do can remove the Chinese Dragon from his left arm, and his recapture should be but a matter of time.

グ」號であつた。それから又苦しい忍耐試験に出逢つた。夕方八時の時が来るまでに驚く勿れ、余は十有六時間の間草藪の中に匿れて居たのであつた。

其時が来ると余は再びボートに乗つた。余は注意深く漲潮流が正に始まりつゝあつた頃上流へと進み行き、余が夜前乗り上げた彼の石炭船に繫泊した。余の横の方僅かに五百メートルの所に「プリンツエス、ユリアナ」號が其浮標に碇泊して居た。

尙ほ時間があつたので、余はボートの中に長く寝ころんで微睡を結ばうとしたが之れは無益であつた。満潮の流れは膨れに膨れて来て、間もなく余は泡立ち騒ぐ水勢に取り巻かれて居た。

其夜の十二時に周圍が静かになつて来た。そして一時頃ボートが水の中を静かに揺れ出すと、余は河岸より離れ、其船尾に斜に座つて、恰もキールの港内で日曜日の快遊でもして居るかの様に、無上の平靜な氣分で汽船の方へ漕いで行つた。

余は人に見られない様にして繫留浮標に取り着いた。

ブリッショー猶ほ縛に就かず

手掛りは支那龍

ドニングトン、ホールの脱走者、獨逸海軍中尉ゲンテル、ブリッショー事脱走後七日未だ縛に就かず。然りと雖も極東勤務中彼の左腕に施したる文身の支那龍は彼の身柄を曝露すべし。

彼はトレビッツ中尉（彼は二十四時間内にミッウォール船渠にて逮捕せられたり）と共に脱走せるが、其後の詳報に依れば、去る日曜日初夜の點呼をなしたる際、ドニングトン、ホールは猛烈なる一大雷雨の襲ふ所たりし也。

彼等兩人は他の捕虜と共に鐵線櫓の二重輪の内輪以内に集合せずして、外輪内に潜伏したり。彼等の姓名は他の捕虜が答へたり。外輪の附近にある木板は、實に彼等が如何にして鐵條網を權切つて脱走せしかを示せり。

（余の逃走後一週間の逮捕狀）

見上げると汽船の輪廓が鮮かな黒い船首を突き出して城廓の様に高く聳へて居た一衝強く推すと身はひらり浮標の上に乗つて居た。それから忠實な小艇に強き一蹴を加へると、艇は丁度今始まつて來た退潮の流れに依つて下流の方へ流れ去つた。余は鼠の様に靜かに數分間鐵粘土の上になつとして居た。それから鐵の様に落ち着いて猫の様に丈夫な錨索を傳つて船首の錨索通入孔の間から船内に攀ち登つて行つた。それから余は用心深く頭を甲板の側にある下水溝の上に押し込んで、四方を見張つた。

船首甲板には誰れもゐなかつた、

ちよつと腕に凭れかゝるかと思ふと余は既に上甲板に上つてゐた。

十四 密航の冒険

余は上甲板をコツソリ歩いて揚錨機の所に行き、先づ錨鎖を巻く圓筒の下の油槽の中に潜伏した。

周囲が全然静穏で何人も居なかつたので、余は潜伏所から這ひ出で、靴を脱いで前甲板の隅の物蔭に押匿した。そこで靴下の儘で忍び歩いて四邊をよく偵察した。自分が前甲板の後部の角から用心深く荷積甲板の方を見下すと、余は突然驚いて身を屈めた、そして呼吸を殺し瞬もせずに通風機に凭れかゝつて動かずに居た。見れば下の荷積甲板には二人の歩哨が立つて、鋭どく余の方を見上げて居たのである。余が三十分以上も半身を屈した儘、此位置にあつて、既に膝も痛む様になつた頃、一見した所夜勤を終へたかと思はれる二名の女給仕が中甲板からやつて來た。する

と二人の番兵は此好機を逸せず間もなく彼等との立ち話に熱中して、其後は彼等の周圍に何事が起りつゝあるか彼等は更に注意する所がなかつた。

このとき夜は既にほのくゝと明け初めて居た。余は今若し此最後の場合に至つて失敗するやうになると、折角是迄に丹誠した甲斐もないから、早速仕事に取り掛らなければならなかつたのである。

余は二對の戀人同士と反對側の船首甲板を通つて船尾の方に下つて行き、荷積甲板に來た。

余は一秒時だも猶豫せず徐々に進んで、兩人の番人に見られぬ様に過ぎて、運よく遊歩甲板に到着した、それからスタンション（天幕柱）に攀ち登つて間もなく救難用のボートの側に來たのである。

余は片手でしつかり身を支へ（十二メートルも下にテームズの河は奔流して居た）他の手と齒で端艇の覆の麻紐を二三本解き離し、最後の力を振り出して其小さな

穴に匍ひ込み、甘く艇内に匿れて了つたのである。

そこで内側から、今解いた紐を再び結び合はした、大丈夫、此救難用の端艇の中に密航者が忍んで居やうとは誰も思ひ附かぬであらう。

それで兎に角密航の支度は済んだ。が、法外な肉體の努力と精神上の興奮と更に又腹を絞る様な飢餓とが刻々に余の身を苦めて來た。余は身體を長く横たへ縦に坐板の上に伸び廣かつたが、其瞬間既に自分の周圍の事は一切覚えて居らなかつたのである。

十五 自由の首途

かくて余は救難用端艇の中に殆んど死んだ様になつて、夢一つ見ずに寢て居つたが、鋭どい汽笛の響きに喫驚して目を醒した。

余は萬一の爲めを慮りて用心深くボートの覆の紐を解き其覆を少し取り廣げて船外の様子を覗いて見た。すると自分は歡喜の餘、聲高く萬歳を三唱したくなつた、實は丁度其時此船はフリッシンゲンの港に到着したのである。

最早斯うなれば余の身は幸福である。既に何事にも心配するに及ばなかつたのである、余は小刀を取り出し、一刀の下に覆の麻紐を切斷した、併し今回はボート甲板に接した方の側を切つたのである。

余は蘇生の思ひをしながら、ボート甲板の真中にひよこつと立つた、そして今に

も逮捕されるのを待つて居た。

所が誰一人として余の舉動に注意するものはなかつた。船の乗組員は碇泊の仕事に従事して居り、他の客人等は其荷物の始末に忙しかつたのである。

そこで余は遊歩甲板に降つて來た。自分ながら酷く汚れて居たのと擦れ切れた青色の靴下を穿いて居たのとで（其他のものは先づ稍整つて居た）二三乗客の視線を惹いたらしい。併し其時余は極めて幸福な運命に立ち、其眼は光明に輝き其口は快活な言葉を繰返し、且つ其不潔な顔からは鮮やかな喜悅の色が溢れて居たに違ひなかつたらう。幾多の婦人客は驚異の眼光を注いで余を瞥見するものもあつた。

余は此珍奇無類の服裝で最早船内の上甲板さへも逍遙することはできなかつた。余は何氣なく前甲板に行つて、靴を持つて來た（之は余の一番善いホツケー靴で、倫敦の慈善會で購求した品なのだ）間もなく船中の乗員らしい和蘭の一水夫が口汚なく余の垢面弊衣を難詰するのを氣にも懸けず、平氣で其好きな物品を身に着けて

悠然と舷門の方へ進んで行つた。

其汽船は已に埠頭に横着けになつて居た。

船客は船長や高級船員に告別して船を去つて行つた。最初余は和蘭の汽船會社に損害を與へるやうでは氣の毒なれば一應船長に面會して自己の身分を明かさうと眞面目に考へて居た。が、其後慎重の態度を取る必要を感じたので、余はゾボンの衣兜に手を入れ、如何にも情けなさ相な素振をしながら水夫らしい足取りで舷門をよた／＼とぼ／＼と揺れて下りて來た。

此場合多くの人は只冷笑を洩すのみで、誰も余に注意を拂ふものはなかつた。余は恰も本船の乗組員であつて、索具を修理する手助けでするものゝ様に見せかけた。それから余は群衆の中に紛れ込んだ、そして乗客か嚴しい検査を受けつゝあつた間に余は彼方此方を見廻し、垣根に一枚の扉があつてそれに大文字で「出る事を禁ず」と書いてあるのを發見した。

之が確かに自由の天地に入る途であつた！

時を移さず余は此極めて造作もない障礙物を通り越えて其外側に出た。

最早我身は自由の境遇に立戻つた！

余は欣喜の餘り丸で狂人同様に跳ね廻らん有様であつたが、自ら輕躁の舉動を戒め、強て忍耐の全力を盡して自己の身上を警戒することを努めた。そこで二名の同國人が自分の體を引き受けて呉れた。彼等は余が將校であること、竝に余が英國より首尾よく逃走して今茲に成功の階段に達しことを最初は容易に信じなかつた。

余は驚ろいた、余が使用した浴槽の水は何と云ふ汚穢の狀だらう！

余は此日の夕方に三人分の食事を全く平らげた。

其翌日余は數多の小間物類を買ひ入れてから、單獨で労働者の服裝で獨逸行の汽車に飛び乗つた。而して汽車が將に動き始めんとした時、後ろから自分の肩を軽く打つ人があつて（然し此挨拶の方法は自分は甚だ嫌ひであつた）感歎に斯う言つて

余に訊いた。

「貴方の書類はどこにありますか」

余は斯う言つた「一體貴方は何誰です？」

「私は秘密探偵です」

「それは誰でも言へる事です」

「全くそれに違ひはありません、之が私の合札です」

余は此言葉を聞いて顔色が眞蒼になる様な氣持がした。けれど余は極めて言語を和らげ禮を厚くして丁重に此男に對して、自分は何等の書類も持つてゐない、兎に角直接に旅行するものである。我々は和蘭政府の爲め決して不正不利を醸するやうなものでない旨懇々と説明した。

探偵「左様ですか、貴方は英國から來て、然も何等の書類も持つてゐないのですね、それは随分御困難な事でしたらう」

「左様です、随分困難でした」

「ちやあ今後とも御無事に御旅行なさい！」

我々は相別れるに臨んで握手を交はした、そして余の搭乗した汽車は直ぐ動き出した。

十六 祖國への歸著

余の身體はちつと座席の上に長く辛抱してゐることは出来なかつた。余は一等車の特別室に一人であつたが、頭腦の中を渦巻き廻る種々の迷想到に悩まされ千思萬考の末に、恰も鐵檻の中に在る猛獸の如く室内を右往左往して歩き廻つた。

汽車の旅は是迄よりも至て長く長く思はれたが、終に――汽車は緩かに獨逸の國境を通り過ぎた。

黒白の測量竿が余の眼についた、余は窓から身體を半ば乗り出して、歡聲朗らかに自ら萬歳を數回叫んだ。

然し三度目の萬歳は余の咽喉に詰まつて發することができなかつた、余の心は感謝と恐悅と幸福との感念に壓倒され、思はず聲を放て咽び泣いた。兩眼から數行の

熱涙が迸り落ち、歡喜の情は如何ともすることが出来なかつたのである。

是は果して余の性質の柔弱なる爲であらうか。

汽車は遂にゴッホに到着した、余はこのとき初めて暗褐色の服装の兵士がプラットフォームに立つてゐるのを認めた。余は何の心配もなく汽車から飛び下りた。

すると偶余の衣服の襟をしたゝか掴んだものがあつた、見るとピカ／＼輝やける鐵兜帽の下に犖犖な眼光を閃かした、頑丈な普魯西の番兵長が其鐵の如き拳固で余を攫へてゐるのであつた。

「ハ、ア、彼奴を取つ捕まへた！」

余は勇敢な暗褐色の人の頸つ玉に好んで飛びかゝらんとしたのであつた。余は今日迄此瞬間ほどに安全確實の運命を感じたことはなかつた。

余は自ら自分の證明を爲さうとしたが、僅かに微笑（之は他人ならば格別慰藉となるべきものではなかつたのだが）を以て迎へられたものであつた。

余は翌朝二名の忠實なる國民兵に依りてヴェーゼルへ輸送された。

事務室にはまだ何人も居なかつた。小兒共は余の後を追ひかけ、小石を投げつけ「捕まへた、捕まへた、間諜を！」と叫んでゐた。立派な金髪の少女迄も！傳令が余を迎へに來た。

「マア御着席ください、君の様な人々に對しては長い訊問はしない、F海軍大尉殿が見えさへしたらホンの簡単な審問があつて、君はぶらりと吊り下がるのだ！」

霎時するとその嚴しい人がやつて來たが、無論余の同僚であつた。其の時の驚愕と喜悅とは迎も筆には盡されぬ。併し此可憐な傳令の呆然たる顔色と言つたら！此男は直に疾走を命せられて余の爲めに朝食を取りに遣されたのであつた。

余の特に面白く感じたのは此ヴェーゼルで讀んだ英國の逮捕狀である。丁度七月十二日即ち余が既に業に自由の境遇になつた時の「デーリー、メール」紙に出てゐたのだが、その終りの所には多分余が水夫として中立國の汽船に勤務するかも知

れぬとしてある。然も其終に

彼は勿論遅かれ早かれ逮捕さるべきことは毫も疑を容れぬ。唯其逮捕は時間の問題たるに過ぎない。

と述べてあつた。何たる滑稽だらう！

夫より一時間後に相變らず労働者の服装でポケットには旅行券を携へて、伯林行の汽車に搭乗した、そして無論……一等車を取つたのであつた。

かくて余は遂に目的地に到着した。余は青島から獨逸國まで切り抜けるのに實に九ヶ月を要したのであつた。

獨逸國よ！余の愛する祖國よ！到頭余は母國に來たのである。

此千九百十五年七月十三日に太陽は壯麗な光を湛えて照り輝いてゐた、余の兩眼は和樂の温容を帯び、酔つ拂つた様になつて美しい郷國の光景に恍惚として居たのである。

一等車の中では余一人のみであつた、余は意氣揚々として兩側の窓に寛かに陣取り、鉛筆を以て今日迄の顛末を書き始めた。

ミュンスターで陸軍の一高官が盛装して余の車室に這入つて來た。余は禮を盡して立ち上り、窓の側の一方の席を片付けて斯う言つた「何卒閣下には此窓側の席をお取り下さいますか」と彼の鐵の様に堅い眼から憤怒の相が見えて來て、侮蔑した風に咽喉の中で「ブル」と音がして、どんと戸を閉め、遁げて行つた。

偶然にも此小冊子が其閣下の手に入る事があつたら、當時余が如何なる服装をしてゐたかを全然忘れてゐたのを寛恕せらた。余は切に之を祈る次第である。

夕方七時に汽車はツォー停車場に到着した。

二つの美しい碧眼が涙に濕めつて光つて居た、不思議な程色赤き薔薇の巨大な花環が余の腕にかゝつてゐた、そして再會の幸福を相喜ぶ爲に片言隻語を發することも出來ないで我々兩人は相携へて停車場を出た。

其次の數日間余は丸で夢に夢みる心地で過ごした。

夫れから余が海軍々令部に出頭した時の如き、無論門衛は最初余を入れなかつたのである、大商店に於ても亦、急ぎ種々の買物をしたかと思つたのだが（余の所有物品は、今身に着けて居る勞働服以外には何一つ持つてはゐなかつた）初めの程は無論入口の番人が余に門前拂を喰はさんとしたのであつた。

其後數日間余は帝國海軍省で勤務することゝなつたが、實際余はカイゼル陛下より立派な感謝狀を賜はり、

鐵十字章功一級に叙せられ、空前の名譽に身を飾つて、意氣揚々として郷里に歸ることを得た。

かくて數週間の休養をなした後更に最大の報償に接した。

余は再び飛行家となつて、獨逸國の戰勝といふ大事業に加はる事が出来たのである。

そして恐れ多くもカイゼル陛下が東部戰線に於て、余の指揮の下にあつた海軍飛行機駐屯所を檢閲せられたとき、余に握手を賜はり、親しく賞讃の辭を垂れさせ給ふた時には、余は感涙に咽びちつと陛下の兩眼に見入つたのである、すると余の魂の中には下の言句が燃えて居た、

カイゼル陛下と我獨逸帝國との爲に余は神と共にあらん！

青島から飛出して 終

大正七年一月廿二日印刷
大正七年一月廿五日發行

【定價金壹圓拾錢】

青島飛出
奧付

不許複製

著者
同發行者
印刷者
印刷所

若林欽
廣政幸助
河本龜之助
河本俊三
東京市麹町區
平河町五丁目九番地
洛陽堂印刷所

發行所

電話
東京二〇九一四番

洛陽堂
東京市麹町區
平河町五丁目

洛陽堂發行圖書目錄

東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

洛陽堂

電話番町四二五八番
振替東京二〇九二四番

著 近 生 先 欽 林 若

面白い科學の話

布製 六箱
定價 圓五拾四錢
送料 八錢

海の自然科學

布製 五箱
定價 圓六拾三錢
送料 八錢

新案料理法

定價 八拾錢
送料 六錢

發行所 東京 河京市 麹町五丁目 洛陽 堂

黑田啓次譯

世界自然科學史

定價 金二圓五十錢
送料 金十二錢

田尻稻次郎著

地下水利用論

定價 金一圓五十錢
送料 金八錢

藤本祐教著

平叙日本佛教

定價 金一圓六十錢
送料 金八錢

海老名彈正著

戰後文明の研究

定價金五十錢
送料金六錢

山本瀧之助著

一日一善講話

定價金七十錢
送料金六錢

天野藤男著

農村と娛樂

定價金一圓三十錢
送料金八錢

小酒井光次著

生命神秘論

定價金一圓六十錢
送料金十二錢

渡邊喜三著

遺傳の研究

定價金一圓五十錢
送料金十二錢

山本瀧之助著

一日一善

定價金四十五錢
送料金四錢

山崎延吉著

農村教育論

定價金一圓九十錢
送料金十二錢

中川 望著

自治講話 優良村巡り

定價金二圓五十錢
送料金十二錢

小河原忠三郎著

農村社會學

定價金二圓五十錢
送料金十二錢

高島平三郎著

教育に應用したる 兒童研究

定價金貳圓八拾錢
送料金十六錢

高島平三郎著

家庭及び家庭教育

定價金九十五錢
送料金八錢

高島平三郎著

兒童と謳へる文學

定價金壹圓
送料金八錢

高島平三郎著

婦人の生涯

定價金一圓四十錢
送料金十二錢

高島平三郎著

心理百話

定價金六拾錢
送料金四錢

河合三郎著

不用意が招く愛兒の死

定價金一圓二十錢
送料金十二錢

高島平三郎著

女の心 附錄 嫁と姑

定價金四十八錢
送料金四錢

元良、高島、永井、富士川合著

兒童學綱要

定價金壹圓八十錢
送料金拾二錢

岡村準一著

兒童保護の新研究

定價金貳圓二十錢
送料金十六錢

ムーレー博士著 水野義三郎譯

一才より廿一才に至る

小供の生活

定價金五
送料金四
十
錢

高島平三郎編

精神逸話の泉

定價金一
送料金八
圓
錢

永井 潜著

生命論

定價金三圓三十錢
送料金十
六
錢

高島平三郎著

心理學上より觀たる

日蓮上人

定價金一圓六十錢
送料金十
二
錢

永井 潜著

生物學と哲學との境

定價金三圓八十錢
送料金十
二
錢

富士川游著

金剛心

定價金五
送料金四
十
錢

稻葉幹一著

教育期兒童之健康法

定價金壹圓三十錢
送料金八錢

ケーラス博士著

家庭に於ける
兒童教育の理論及實際

定價金七十錢
送料金八錢

田結宗誠著

小兒の育てかた

定價金五十錢
送料金四錢

手塚光貴著

忠

孝

定價金六十錢
送料金四錢

山本瀧之助著

青年
修養着手の個處

定價金九十五錢
送料金八錢

花田仲之助著

報德實踐修養講話

定價金五十錢
送料金八錢

石川 弘著

通俗孝子傳

定價金六
送料金六
十
錢

嘉悅孝子著

怒るな働け

定價金八
送料金六
十
錢

福鎌恒子著

奥様とお女中

定價金六
送料金四
十
錢

高橋 信著

養生の話

定價金四十五
送料金四
錢

竹中繁次郎著

死の現象

定價金一圓二十
送料金八
錢

大塚小一郎著

深き廣き基礎に

定價金九
送料金六
拾
錢

生物學上より見たる

262-94

上澤謙二著

又逢ふ日まで

定價金四拾錢
送料金四錢

加藤一夫著

トルイヌ 一日一想

定價金壹圓拾錢
送料金八錢

山本瀧之助著

模範日

定價金四拾錢
送料金四錢

終